

# 小田原史談

第 188 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20  
アオキ画廊内TEL(24)0637

## 新春を迎えて

### 明けましておめでとーございませす

本年も史談会にお力添えをお願い申しあげます

今年(壬午(みずのえうま))の年という事で、馬のもち味がとりざたされております。

わたしは「秋月」という、家で飼っていた馬を思い出しました。少年時代のことです。

私は大正八年(二六)生まれです。少年時代は昭和一けたから二けたにかけた頃となりません。いわば純農村の中で育つて

きた少年時代でした。私と秋月とのつきあいは、小学二〜三年頃から中学五年生までの十年ほどになります。

まず飼葉切り。牛馬を飼っていた農家では、飼葉切りが子どもの仕事でした。飼葉(藁や干し草を小さく切った牛馬の飼料)を「押切」で、藁を小さく切ります。藁をいい加減に手先

で押し出してゆく技が身につきました。今思うと、切る経験の積み重ねが神経の発達をうながし、うまく切る神経が育ったものでしょう。

秋月の食事係は、朝が兄、夕方私でした。私が馬小屋に行くと、秋月は寄ってきて頭を振ります。おねだりです。

田植えの時の鼻取りは、きつい仕事でした。秋月の速さによる疲れや、素足の痛さ(足の裏など)には、参りました。脛(すね)はさずだらけです。履くと泥土に足がとられて歩きにくく、秋月の速さについていかれません。

朝六時頃から鼻取りしているので、体が休まるおこじ飯は嬉しいものでした。秋月も汗びっしょりの体です。藁でふきとってやりました。

この代かき作業は、十五日ほど続きました。一町五反の水田を耕作していたので、このくらいの日数はかかりました。このころの学校は、農繁休暇が二週間ほどあったので、学校に行かなくてもよかったです。

十二月になると、秋月と一緒に、矢佐芝の奥まで薪を取りに行きました。帰りは秋月の背中の両側に、三把ずつ計六把の薪を背負わせました。百キロはあったと思います。でっばった石や穴ぼこが続く道、でこぼこ

道でしたので、下の秋月は大変です。兄の「ハイ、ハイ、ハイ」(気をつけるの意味)に、「ハイヨ」と答える素振りをする秋月でした。

安全な道になると、手綱を長くして、馬が人間より前にして歩かせました。追手綱(おいたづな)といいました。途中に十字路や三叉路(さんさく)があっても、決して間違えません。馬の鋭い潜在能力にびっくりし、利口な動物と強く感じましたのでした。

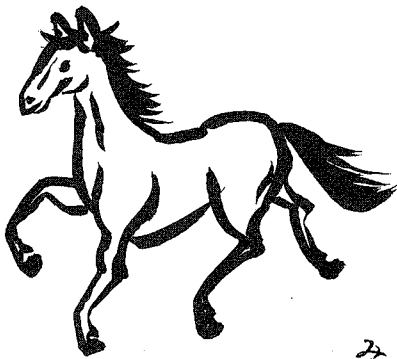
生業(なまごころ)に必要な物資の運搬や耕耘に、牛馬の力を借りていた時代の話です。私たち年代(昭和一けた生まれの年代も含めて)は、これを語れる最後の体験者と考えます。裏腹にある機械化は全産業に普及し、人力が主力の生業はごく僅かの社会と変貌しました。

そこでみな様によびかけます。人力の汗が滲む一生けん命に働いてきたわが人生・わが地区の記録をとることを。自分がしてきた生業に、地区の営みに、愛着や誇り・自信があったはずですから。それを出しあいましょう。文のへたの思いは皆同じで、要は中味です。

この先導役として、私の拙い文をあえて載せた次第です。

小田原史談会長 山口 一夫

平成十四年  
賀春



内田美枝子 画

# 小田原の気象 (その一)

芦川 あしかわ  
たかし 駿

一、気象観測こと始め  
記録によれば、日本の気象観測の一番最初は北海道函館測候所から始められた。明治五年二八三であった。

東京気象台は明治八年から業務が開始され、その下に全国に二十五ヶ所の測候所が明治十六年に出来た。

明治二十年(二八七)条令改正により東京気象台を中心に改め、従来の測候所は国立府県営に改め五十一ヶ所に増設した。

神奈川県では、明治二十九年横浜に「神奈川県測候所」が出来、一日六回の気象観測業務を開始し、県内各地にも次々に観測事業が開始された。

当時、小田原でも明治四十四年の官報に県立小田原中学校(現在の小田原高等学校)と小田原町役場の二ヶ所の観測結果が載り気象観測が始められている事が分った。

しかし、大正十二年九月の関東大震災は各地に大きな被害を与え、当時の観測器材も大きな被害が出て以後観測不能に落ち入り中止してしまつた。

国では、翌十三年には「気象通報」をラジオ放送に組み込み生活に密着させ、新聞に「気象欄」や気象警報を設けて革命的な進歩を示した。

昭和五年には民間航空室の開設により、「航空業務気象」「雷雨警報業務」等の保安気象を、十三年・十四年には「高層気象」や「海洋観測」の為、洋上に「定点観測所」を設けて業務化し、台風等の気象災害や長期予報に備えた。

本県でもこれらの施策に対し各地で観測が始められたが、その詳細については明らかではないが、県から出ている官報の「県下各地の気象観測月報」により当時の気象状況を知る事が出来た。当時観測されている場所は、下記の様に広い範囲で行なわれていた。

- 横浜市 海岸通りの県庁・神奈川村
- 久良岐郡 日下村笹下
- 橘樹郡 保土ヶ谷町・高津村溝口
- 都筑郡 都田村川和
- 三浦郡 三崎町小網代

- 三崎町 公郷・汐入
- 鎌倉郡 鎌倉町・戸塚町
- 高座郡 茅ヶ崎町・藤沢町・溝ノ口町上溝
- 中郡 大磯町・秦野町・大山町・吾妻村二宮
- 上郡 松田町
- 下郡 真鶴町・小田原町・湯本町・箱根町
- 津久井郡 中野町・島屋村・与瀬村

さらに昭和に入り、国際関係が一段と険悪となり、気象観測も国の機密扱いとなり軍の管理下に置かれて公表が禁じられる様になった。

## 二、戦前・戦後の気象観測

私は昭和十五年春、師範学校を卒業すると市内第一小学校(現在の三の丸小学校)に赴任し、四年生の担任と県から気象観測員を命ぜられた。この学校は唯一、この春より観測器材を準備して県西の気象を記録すべく準備していた。気象観測員は毎日決められた時刻(当時は午前十時、現在は午前九時)に気象観測をしてその日のうちに気象異変(地震や津波等の気象異変等)が起きれば即刻電話や電報で県の測候所に報告する等、常時異変に気を使い、気の休まる事も

ない状態であった。間もなく、太平洋戦争が始まり、気象観測も軍の監視下に入り、一層厳しくなつた。昭和二十年八月十五日、厳しかった太平洋戦争も遂に終戦となり、敗戦国となつて戦時中に関わつた書類一切(財は集められて焼却する事になり、気象の記録も涙をのんで焼き捨てた。気象観測に精魂を尽した記録も、戦争には直接関係は無かつたが、すべて灰燼と化してしまつた事は誠に残念であつた。

三、新制中学校気象部  
昭和二十二年、新たに新制中学校が発足し、私も新制度の中学校(市立第一中学校・後に城山中学校と改名)に移つた。ところが、生徒は集まつたが校舎も個々に渡る教科書も無く、仮設の借り校舎で教室だけが割り当てられた。

私は理科の教師だが教科書も何も無い所で何を教えるか? ……ふと思ひ付いたのは、精魂を込めた気象観測を生徒と共に実施して自然界の一端を勉強させたらと考えて計画を立てた。小学校の気象の百葉箱を借りて、使い馴れた気象を教え始めたが、一ヶ月もたたぬ間に教科書も整い、正規の授業も始まつて臨時の気象はクラブ活動「第一中学校気象部」となつた。

昭和二十二年、新たに新制中学校が発足し、私も新制度の中学校(市立第一中学校・後に城山中学校と改名)に移つた。ところが、生徒は集まつたが校舎も個々に渡る教科書も無く、仮設の借り校舎で教室だけが割り当てられた。

クラブ活動「第一中学校気象部」が毎日気象観測をしているうちに、市内では戦後の復興で市役所を始め競技場や公共場所が続々と新築を始めて、その為の気象データの要求が、唯一市の気象観測をしている第一中学校気象部に集まり利用され、重要視された。

ところが、昭和四十四年一月夜半、城山中学校が学校火災で大部分が焼け落ち、気象部も露場(気象観測器具が置かれ観測する場所)も野外で踏み荒らされ、計測機具はすべて破損し使用不能となり、特に野外にあった雨量計や地中温度計はすべて破損されて使用出来ず、気象部も終に廃部に追い込まれた。

新制中学校開校以来、連続として小田原の気象を観測し続けた「城山中学校気象部」も、ここに至って遂に廃部に追い込まれ、誠に残念であった。

四、小田原の気温

さて、小田原の気象記録は、幸の事に前述の様に明治時代からの記録はある。一応現代の観測記録と比較してみよう。

現在と大正時代の小田原の気温を比較すると、あまり変化は無いが、冬が暖かくなり厳冬の季節が緩和し、凌ぎやすくなつた事がはつきりしてきた。

○小田原の大正時代の気温

a、大正元年から同十年までの年間の気温の平均。

月	平均気温
1月	4.9
2月	5.5
3月	8.2
4月	13.7
5月	17.3
6月	21.6
7月	26.0
8月	25.9
9月	22.3
10月	17.5
11月	12.3
12月	6.9
平均	15.2

b、昭和四十六〜五十五年の十年間の気温の平均。

月	平均気温
1月	6.3
2月	6.0
3月	8.2
4月	13.9
5月	19.8
6月	21.8
7月	28.9
8月	24.0
9月	22.9
10月	17.7
11月	12.7
12月	8.8
平均	15.9

c、昭和五十六〜平成二年の十年間の気温の平均。

月	平均気温
1月	6.4
2月	5.5
3月	8.7
4月	13.6
5月	18.5
6月	20.5
7月	25.1
8月	27.7
9月	22.3
10月	17.9
11月	12.7
12月	8.6
平均	15.6

d、平成三年〜平成十二年の十年間の気温の平均。

月	平均気温
1月	6.5
2月	7.2
3月	9.9
4月	14.4
5月	18.2
6月	21.5
7月	26.2
8月	26.7
9月	23.4
10月	18.5
11月	13.8
12月	9.4
平均	16.3

e、昭和四十六〜平成十二年の三十年間の気温の平均。

月	平均気温
1月	6.4
2月	6.2
3月	8.9
4月	14.0
5月	18.5
6月	21.2
7月	26.7
8月	26.1
9月	22.9
10月	18.0
11月	13.0
12月	8.9
平均	15.9

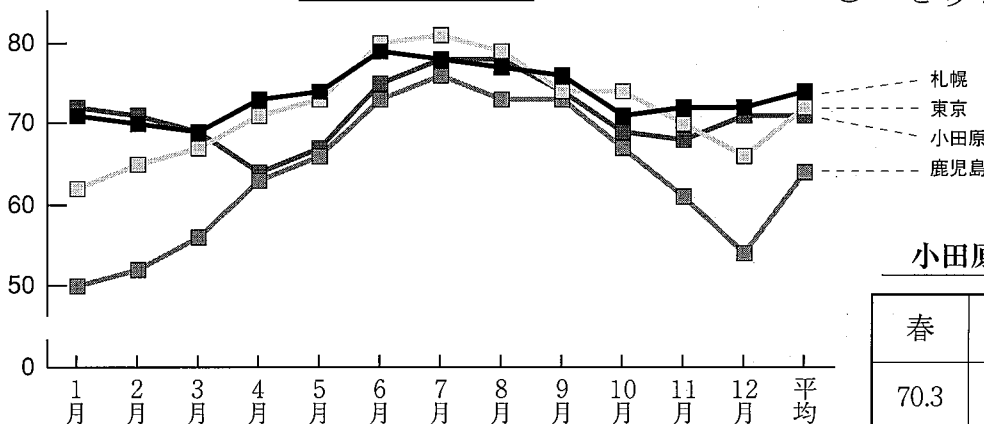
各地の月別平均湿度 (%)

(1961~1990)

場所	月												X̄
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
鹿児島	71	70	69	73	74	79	78	77	76	71	72	72	74
小田原	62	65	67	71	73	80	81	79	74	74	70	66	72
東京	50	52	56	63	66	73	76	73	73	67	61	54	64
札幌	72	71	69	64	67	75	78	78	74	69	68	71	71

五、小田原の湿度  
私達の周りの空気には、水分が含まれているが、その含まれている割合を「湿度」と言い、入梅の頃は「湿度」は高いし、冬の天気の際はカラ／＼と低くなる。日本は四方を海に囲まれているので、湿度は高いが世界は二〇％〜三〇％の所も多くある。小田原の湿度を他市と比較しながら調べてみよう。

月別平均湿度



小田原の四季別湿度 (%)

春	夏	秋	冬
70.3	80.0	72.7	64.3

江戸時代初期田島に穴居した

# 風外慧薫禅師 二

野地 芳男

## 2 時代背景と風外禅師の思想 成願寺を去り田島の岩窟穴居へ

当時の時代背景・その後の風外禅師書画等から見られる思想を調べてみよう。

風外禅師は、永禄十一年(五交)に上州(群馬県)碓氷郡土塩村に生まれた。当時代は、戦国時代であり、織田信長・武田信玄・徳川家康等の武将が入り乱れ、戦いに明け暮れていた。天正元年(一五三三)風外禅師六歳頃に、後閑村(群馬県)の長源寺に入り、更に天正十一年(一五三三)禅師十六歳には、北群馬郡子持村の雙林寺に隸籍している。

つまり、幼少の風外禅師は各寺にて修業し、学問はもとより相当の教養を身につけていたと思われる。このことは、後に風外禅師の書画から読み取れる。今少し禅師が過ごした二十歳〜五十歳位の時代背景を年号順に調べると、

慶長五年(一六〇〇) 風外禅師三十三歳頃

関ヶ原の戦い(東軍・徳川家康大勝す)

慶長十四年(一六〇九) 禅師四十二歳頃

徳川家康・秀忠ともに、相模国大山寺に法度を下した。

慶長十七年(一六一三) 禅師四十五歳頃

徳川家康・秀忠ともに、曹洞宗に法度を下した。

慶長十八年(一六一三) 禅師四十六歳頃

徳川幕府・紫衣および諸寺院の法度を下した。

慶長十九年(一六一四) 禅師四十七歳頃

大坂冬の陣・大坂夏の陣で徳川家康は大坂城征討。さらに、幕府は諸宗本山本寺の諸法度を定めた。

元和二年(一六二六) 四月十二日: 徳川家康没す。

元和三年(一六二七) 禅師五十歳頃

徳川幕府たびたび諸国の寺社領を安堵し、また法度を下した。

下した。

(註)この前後頃、風外禅師は成願寺に入っていた。

元和六年(一六三〇) 禅師五十三歳頃 幕府は江戸城石垣など修理のため諸大名に助力を命じた。

元和八年(一六三三) 禅師五十五歳頃 江戸城本丸修理完成・キリスト教徒処刑五十五名(元和大殉教)

(註)この前後頃、風外禅師は田島横穴古墳跡に入った。

さらに、当時代の背景(幕府と寺社関係)を見ると、元和九年(一六三三) 徳川三代・家光 征夷大將軍 となった。

(註)徳川家光の乳母

―春日局 (本名: 斎藤福)

この春日局の孫

が、小田原藩主・

稲葉忠則である。

寛永元年(一六二四) 禅師五十七歳頃

(註)この前後頃、風外禅師は上

曾我の風外窟に入った。

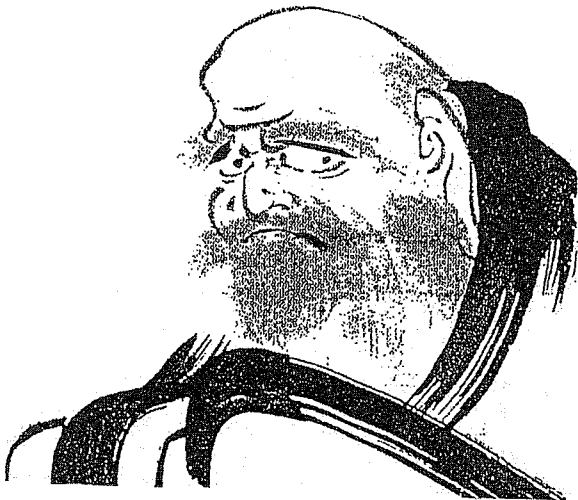
寛永四年(一六二七) 禅師六十歳頃

徳川幕府は僧侶の諸出世法度を定めた。

寛永五年(一六二八)

徳川幕府は、江戸城修築につき諸大名に助力を命じた。

以上、風外禅師が小田原に入った前後の幕府の動きと寺社に対する時代背景を記した。既に、ご理解された通り、時の幕府は、寺社に対して「法度・また法度」を連発して寺院等に介入している。また、社会的背景は、戦国時



代を通り抜け諸国統一に向かっていた。しかも幕府は江戸を中心に諸大名に対して、江戸城修築を命じていた。

このような時代に生きた人・風外禪師は生い立ちから、幼年(青年)・壮年へと学問はもとより、禅僧として修業はされていた。特に禅師の多くの墨画、書を見ると、戦国の戦い・幕府の法度等で、封建社会的な権力に抗し、禅から学んだ信念に没入したと伺える点が多々見られた。

一方、風外禪師は、書面に禅を示しながら、日々母の像を拝し、子供と遊び、天神様を祀ったりする反面、俗世の戦、権力、身分差等に嫌気を募らせ、人郷離れた山中に穴居し、墨絵・書詩に己れの心を現わしていたと察せられる。

思うに、風外禪師は一般の人々には無い、驚くべき信念と広く深い学問・知性があり、自己欲望のために走らなかつた人であった。

\*寛永二年(二六五)には、武士・町人・農民といった身分制の固定制につながる生活上の規定が強化された。――身分的差別――江戸では、町人の大脇差を帯びる事・遊里での殺人の禁止等が行われた。

### 3 田島の岩窟穴居：

元和八年(二六三)風外禪師五十五歳頃であった。

いよいよ、田島での洞窟穴居である。前述の通り、成田の成願寺を逃れた思いは、俗事を離れ、ヤレヤレと思ったに相違ない。その点では田島の洞窟は都合な所であった。恐らく当時は十分な道もなく、人里から離れ森の中といった、真に静寂な場所であったと思われる。

ここは、横穴古墳が点在しており、近くには滝が流れ、夏期には冷風が吹き、村人も余り訪れることもない。洞窟の中は、雨も露も風も凌げ、生活条件は満たされている。現在でも、当時を偲ぶことができる。

しかし、修行僧として尋常では穴居できない、この点からも風外禪師は並み外れた上人と思われる。後世の人々が「奇僧風外道人」と称しているが、俗人には思い及ばない行動は、村人には理解出来なかつたと思われる。この時期に作つた詩・画が少なくとも三点あつたと松本雲舟氏は述べている。

- その中の代表的な、一首
- 岩房寛友幽禽語
- 深洞落風交水声
- 夢覚仙家人世外
- 閑居寂寞愿心情

この詩は、間違いなく田島風外窟にて、そのままを画(自画像)き読んだもの。風外禪師の心情が現れている。実に感慨深いものがある。

しかも、禪師が世に表した墨画・書は、田島山の生活以前のものは見当たらない。であるとするれば風外上人の真価は、ここからで、出生作でもある。

それ程に大切なものであり、あの洞窟は貴重な史蹟と思う次第である。

風外上人の田島における記録が一徳寺(臨濟宗・建長寺末寺)にあつたが、残念にも焼失してしまつた。『下曾我・田島郷土誌』(昭和三年版)

さらに、風外上人が、どうしてこの洞窟を知つていたのか? 不明である。

現在でも、風外窟は森深く、夏期には生活しやすいと思われ、冬期には午前中は良いとしても、午後は太陽が隠れ夜には相当冷えると思われる。であれば、長期間は無理であると考えられ、次のように推測できる。

私達は、風外上人は成願寺から逃れ、当初二〜三年は田島洞窟に穴居し、その後上曾我の洞窟に移動したと考えた。このことは、多くの風外研究者も詳しく述べていない。

しかし、今でも田島洞窟と上

曾我洞窟を検分すると、上人は当初の時期は田島に穴居するも、その後は夏場は田島・冬場は上曾我で暮らしていたと思われる。

\*風外さんは、「風外窟から近い、上の車(野地孝雄宅)・下の車(下川修平氏)等には多く訪れていたようであつた。

特に、上の車には現在でも、寒山拾得図・釣鐘名号図が立派に保存されている。

その他については、地元歴史家、杉崎正五氏による書物が貴重な資料となつている。

また、上曾我方面からも「風外伝説」は余り聞こえてこない。いずれにしても、残念乍ら地元からは、有力な情報・資料・風



田島・風外窟と筆者

聞は多くない。反面、それだけに少ない資料・口伝を大切にすることが肝要である。

#### 4 初期の画僧としての風外 禅師・その書画

前述した様に風外画は、田島の岩窟以前に画かれたものは見当たらない。申す迄もなく、自画像(自画像)は、此の田島の洞の中で、初めて詩と共に画かれたと思われる。

「山長頌」と題した次の讃も、成田村から田島岩窟に入った、その時の心境を如実に現している。

道人坐臥寸心堅 閱世難移此壑邊  
回首槐安宮下事 六窓深閉一時眠  
老僧坐臥只空山 十二時中寂寞閑  
欲起清壑皆惑我 人間万事人間在  
道人坐臥寸心堅 世をみるに移り難しこの壑辺

首を回せば槐安宮下の事 六窓深く閉して一時眠る  
老僧坐臥只空山 十二時中寂寞として閑なり

清壑に起たんと欲すれば皆我を惑す人間万事人間在り  
壑邊(がくへん・壑Ⅱ洞窟の意)

槐安(かいあん・槐Ⅱすまい、垣) 寂寞(じゃくぱく、せきぱくⅡひっそりして淋しい)

清壑(せいがいぐ)



風外自画像

又、自照画のむだのない筆の運び、その書にしてもすばらしく、筆の流れは実に伸び伸びとして、澱みがない。

勿論、これだけの書・画を表すには、これまでに長い修業と知識も身につけていた事は明白である。同時に秀でた才能が見られる。

現在、地元の田島に保存されている、書画の「寒山・拾得」画、「達磨」画、「釣鐘名号」等

### 山北の交通機関

「山北の交通機関は江戸時代をとおして近代を省いていきなり現代に入ってしまった」

そう云ったのは、山北の山地から通うYさんだった。

虚をつかれた思いだった。考えもしなかった事柄で、余りに突飛な表現と受け止めたが、かえって記憶力の弱い私にも強く印象づけられたのであった。あたかも、水が乾燥した砂地に吸いとられるように……。

おまけにYさんは、社会科の担当ではなく生物の受持ちであった関係から、私にとっては鮮烈であったのかも知れない。しかし、よく考えれば面白い話である。

普通、交通は徒歩から自転車さらにはオートバイに移る。荷

からも、風外上人の画僧としての卓抜した姿を読みとれる。(つつく)

のじ・よしお

昭和十年(一九三三)生まれ。ミカン・梅の栽培と園芸に従事。田島小菊会会長(趣味の会・会員24名)、曾我の郷歴史散歩の会副会長、田島歴史会総務。

物運搬の場合は、駄馬から大八車、さらには馬力ないしリヤカーを経て、オート三輪、小型トラックの経過を辿る。

それが山北町の山地の場合には、駄馬からオート三輪、小型トラックへと突入して、その中間の経過がない。

Yさんは、生物の成長過程を観察するのと同じように、その変化をつぶさに見ていたのだろう。それにしても注意深く観察眼を働かせないと出来ないことだ。

ともかく、山北山地の交通機関の変遷は、中世から近世・近代を飛ばし、一挙現代に入ったことになる。

このような事例は、従来辺鄙であった山村に多く見受けられた現象であったかも知れない。

(岡部忠夫)

# 五 尾崎亮司 補遺 小伊勢屋の身代を揺るがせた 小田原競馬場建設 ④

岡部忠夫

・「小田原保勝会略記」碑に関連して  
 ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ①、②、③  
 (以上第一八四〜八七号)  
 ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ④  
 (以上本号)  
 (次号以下に掲載予定)  
 ・お濠埋立反対運動  
 ・北村透谷碑について  
 ・むすび

## 小田原競馬倶楽部会長に伊勢田廣吉が就任

大正十四年(二五五)十二月十五日、小田原競馬倶楽部の総会が開かれ、会長には伊勢田廣吉が就任した。

伊勢田は、足柄村荻窪(現小田原市荻窪)で桃林舎という牛乳屋を営んでいた。

当時、牛乳屋は、牛の飼育、牛乳絞り、ビン詰め、高温の熱処理、宅配に至るまでの製造・販売の一貫体制であった。現在に比較すると極めて小規模ではあったが、開業するには多小の資本を必要とした。

伊勢田は、青年時代は算数の教師として教育事業に尽瘁した。中年になって大正元年(二五三)九月に神奈川県会議員補欠選挙に国府村(現・大磯町国府新宿)から立候補し四年九月の定期改選で当選した。晩年になってからは、神奈川県牛乳商同盟組合長となった。それだけに人望があった訳だ。

将松

大手牛乳会社販売店のオーナーである守屋時松氏の父君は、伊勢田の影響を受け、荻窪で酪農を営むようになったという。

役員に選ばれた難波健は獣医で、尾崎亮司のバックアップを得て小田原町会議員に就任。松尾は、小田原駅前で菓子商を営み、自分の馬を各地の競馬会に出場させる程に凝り、自分の子供を騎手にするほどに入れ込んだ人。松本は、関東大地震の犠牲となった叔父夫妻の家を継ぎ、岩村(現・真鶴町)で蜜柑園を経営、真鶴外二カ村組合長に選ばれ、文筆家で風外慧薫を世に出した。のち真鶴町長に就任、文人町長と呼ばれるほどの人物。

金野は、新開地で乗馬倶楽部を営むほどに馬に凝った人。開沢は、宮小路で待合「開花」を経営。中川は食肉界トップの経営者。八尾は湯河原で旅館を経営。中山は前足柄村助役で足柄下郡農会副会長。

以上のように、多士落々の人が役員に選ばれている。

## 小田原競馬倶楽部員募集

小田原競馬場に一本化する話が正式に決まると、小田原競馬倶楽部は一口三十円で会員の募集を開始、大正十五年(二五五)五月十一日付けで証券を発行した。尾崎が会員を募ったときは、関東大地震後で思うように事が運ばなかったという。ところが、震災より二年半以上も過ぎ、復興の気運が

あったのである。

出資証券発行の折、記録されたと思われる会員名簿を調べると、加入者は、三九四名、出資数は二、一二六口、金額にして六三、七二〇円となる。尾崎亮司の名はない。尾崎亮司を除いて一番多いのは、国府津三業組合長西山徳太郎の一三四口である。これは先に記したように、花柳界は一日一円その他は一日一銭の日掛けの積立金の残金であろう。次は、金野房雄の六四口、額にするると一、九二〇円になる。続いては、松本越の五五口、一、六五〇円。新会長の伊勢田廣吉は三八口、一、一四〇円であった。ただ、会員名簿は印刷されたものでなく、







小田原町幸町で証券業を営んだ。ところどころで長谷川良輔県議が畜産組合長を辞任するについては、次のような裏話がある。小田原競馬倶楽部は、競馬場の買い上げ額の増額を熱望した。しかし、畜産組合には全額を支払う余力が無かったためであろうか。

結局は、競馬の売上が増えないのは、時の政権を担っている政友会のせいとされた。時の内閣総理大臣は、~~政友会~~ <sup>民政党</sup> 総裁浜口雄幸で、財政の緊縮政策をとった。当時、政界は政友会と民政党の二大政党に分かれていて、地方まで影響を及ぼしていた。つまり、政友会の政策が、庶民の娯楽である競馬を射幸心を増大させるものとして押さえつけたと云う訳だ。

政友会の長谷川県議は、畜産組合の座から下りた。長谷川が県議となったのは、普選が県会に適用されるようになった昭和三年二月二十六日、立候補初当選。後任の畜産組合長には、大正十三年二月二十六日、県議に民政党から立候補当選した小川方正で、僅かの年数だが県議としては、長谷川より先輩になる。昭和五年十月の段階では、まだ、小田原競馬倶楽部

貸借対照表(案)

借 方		貸 方	
未払込資本金	4,480.	資 本 金	90,000.
買 収 費		借 入 金	16,057. 余
(国府津その他)	66,700.	仮 予 金	519. 余
補 償 費	39,000.	返済準備金	42,140.
工 事 費	27,308.		
貸 金	753.		
未決済勘定	8,610.		
什 器	1,371.		
仮 払 金	321.		
預金及預金	172.		
合 計	148,717. 余	合 計	148,717. 余

註 貸借対照表の借方貸方の合計が合わないのは、円までを表示し銭以下を切り捨てたためである。(原文はタテ書き)

収支決算書(案)

収 入 の 部		支 出 の 部	
畜産組合より受入	33,076. 余	保 険 料	72.
雑 収 入	906. 余	給 料	1,419.
		借入金利息	5,417.
		借 地 料	920.
		修 繕 費	2,851.
		通 信 費	101.
		雑 費	1,504.
		弁 当 料	138.
		返済準備金	21,518.
合 計	33,983. 余	合 計	33,983. 余

貸借対照表借方に買収費66,700円や国府津に支払った39,000円が計上されている。本来ならば、収支決算の支出の部に費用として計上すべきであるが畜産組合よりの受入額が少なく償却できないので、繰延資産となると考えられる。なお、雑収入の906円余は、足柄下郡猟友会のクレー射撃で馬場を貸した料金と推定される。(原文はタテ書き)

の譲渡代金が畜産組合より渡っていないことになる。それに、その金額についても不明で、また、尾崎亮司が身代を揺るがせた金額は明らかでない。あるいは、その損害は亮司にとつて、ヘドをみるようなもので苦痛だったため、明らかにしなかったの営業は、表立つことなく営業を続けられたからであろうか……。

ともかく、亮司は計算に疎く、商売には向いていなかったのは事実である。

(この項はおわり次回はお濠埋立反対運動)

昭和四年度収支決算書

	昭和4年11月26日
畜産組合より受取るべき	86,988.35
〃    本年度受取った金額	30,300
差引残額	56,688.35

収 入 の 部		支 出 の 部	
畜産組合より受入れ		借入金返済	1,000.
30,300.		役員手当	500.
出資未払延滞利子	3,279.68	雑 給	107.50
割戻金未払金	189.60	雑 費	604.13
		印紙及通信費	80.31
合 計	33,769.28	合 計	2,291.94

差引残金31,477.34 銀行鍍金及び現金  
 出資金に対する割戻金 2,719口×@¥10. 27,190.  
 残 金 4,287.34

# 小田原叢談 (四十二)

## 石井富之助

### 父子二題

蜀山人太田南畝の著書に『半日閑話』という本がある。この中に「北条氏綱書置」というのが載っている。

戦国時代の武将はそれぞれ家訓を遺しており、北条早雲に「早雲寺殿二十一箇条」「早雲壁書」があることは有名であるが、この「北条氏綱書置」は案外知られていない。

氏綱書置は天文十年(二五二)五月二十一日、すなわち氏綱死後の二か月前に記されたものである。さいわい桑田忠親著の『武将の家訓』の中に、その全文の口語訳が紹介されているので、それを引用しよう。

そなたは、すべてについてこの父より生まれまざっていると思われるから別にいうほどのことはないが、古人の金言名句は、それを耳にしても、往々に失念することのあるのにひきかえて親の書置という

ものは、何か心に忘れがたいものがあるであろうから、このように書き遺して置くのである。

一、大将だけでなく、およそ侍たるものは、義をもつばらに守るべきである。義に違つたのでは、たとい一国や二国を切り取つたとしても後の世の恥辱はどれほどかわかつたものでない。天運が尽きはてて滅亡したとしても、義理を違えまいとさえ心得ていさえすれば、来世にいたつても、うしろ指をさされることがないであろう。むかしから天下の政治をとるほどの者でも、一度は滅亡の時期はあるものである。人の生命はわずかな間であるから、みにくい心がけが決してあつてはならぬ。古い物語を聞いても、義を守つて滅亡するのと、義を捨てて栄華をほしいままにするのとでは、格別の相違がある

ものである。大将の心がけがこのようにしつかり定まつていたならば、その下に使われる侍共は義理を第一と思うものである。それにもかかわらず、無道の働きをもつて名利を得た者は、天罰をついにまぬがれがたい、と知るべきである。

一、侍から地下人や百姓にいたるまで、それぞれ不便に思うべきである。総じて、人にすたりはないものである。器量、骨格、弁舌、才覚が人にすぐれて、しかも道に達し、あつぱれよき侍であると思つていると、意外に武勇に劣つている者があるし、また何事も不案内で馬鹿者で通つている者に武道において思いの外立派な働きをする者がある。それだから、たといいかに片輪な働きしかしなもので、その用い方によつて重宝になる場合が多いものであるから、総じて人にすたりはないものである。その者の役に立つところを召し使い、役に立たないところを使わず、それぞれ何かの用に立てているのをよい大将と申すのである。この者は一向役に立たない馬鹿者と見かぎってしまうのは大将たるものの心として、いかにも浅く狭い心であ

る。一国を領するほどの大将の下には、善人や悪人がどれほどいるかわからない。たとい馬鹿者であつても、罪がなければ刑罰を加えることはできない。侍共の中に自分は大將から見かぎられたと思ひこんでいる者は、進んで仕事をやる気がなくなり、本當の馬鹿者となり果てて、何の役にも立たなくなるものである。それであるから、大将たるものがどのような者をも不便に思つていふことを、人に知らせたいものである。人々をそれぞれ役に立てるの、立てないの、大将の心の中にあることである。上代においても、賢人といわれるほどの人物はめつたにいないのであるから、末世においてはなおさらあるべきはずがない。大将といわれるほどの人にもこれで充分と思われるほどの人物はいないのであるから、見誤りや聞き誤りがどれほどあるかわかつたものではない。たとえば、能を一番興行するにも、大夫に笛を吹かせ、鼓打に舞を舞わせたのでは、見物することは出来ない。大夫に舞わせ笛や鼓もそれぞれの人にいつけたならば、その人を替えることもなく、同じ役者で能一番が成就するの

である。一国を領しているほどの大將は、侍を召し使うのにも、これと同じようなものである。罪を犯したものであつても、小身の者に対しては出来ることなら特別にゆるしてやるべきではあるまいか。

一、侍たるものは、高ぶらずてらわずそれぞれ分際を守るものをよいとす。たとえば、五百貫文の土地を領する身分で千貫文の土地を領する人の真似をするのはよくない。人の分限は天から降ってくるものではない。地から湧いて来るものでもない。それに、定まった地行でも、損にする場合がある。たとえば軍役の多い年があるし、大事にあうこともあるし、親類や同族が多いこともある。この中、一つの存亡でも出来たならば千貫文の分限者でも、九百貫文か八百貫文に減ってしまうものである。ところがこのような場合でも、百姓に無理な夫役をかけるか、商売の利潤を取るか、町人を迷惑させるか、博えきが上手で勝をとるか、考えれば、どのような無理な手段を尽くしても、それを埋め合わせぬこともない。このような考えの者は、出頭人に音物(贈物)を遣わし、色々

と小細工をやるから、家老もそれに目がくれ、これこそ忠節な人であるとはめるから、大將も、五百貫文の所領で千貫文の侍を召使うことになるのである。そうなると、家中の者共は、このような風儀を大將がお好きなさるといつて、華美を好み、何とかして大身者の真似をしようとお世つたあげく、借銀がかさまり、暮向が次第につまり、町人や百姓を踏み倒し、その果てに博えきに心をよせるようになる。そうでもない者どもは、衣裳が粗末であるから、今度の出仕はどうしようとか、引連れる人馬が小勢で見苦しいから今度のお供はどうしようとか、いつて、大將の思召や朋輩の見聞を気にかけてみるが、町人や百姓を踏み倒すことも、商売の利潤を得ることも、博えきをやつて勝つことも出来ないから、結局、仮病を構えて出て来ない。そんなわけで、出仕の侍が次第に少なくなり、地下人や百姓は、それ相應に華麗を好み、その

上、侍どもに踏み倒され、家をあげ田畑を捨てて他国へ逃げ走り、残っている百姓は、何事かあつたならば侍共に思ひ知らせようとたくらむから、国の内はすっかり貧乏になつて、大將の鋒先が弱くなるのである。当今の上杉殿の家中の風儀は丁度このようなものである。よくよく心得てほしい。或いは他人の財産を請け取つたり、或いは親類縁者が少ないために物入りがなく、また、天性の福人もある、と聞いている。このような人々は、たとい五百貫文の分限でも六、七百貫の分限者の真似は出来るはずである。しかし、千貫文の分限者の真似は、余程の小細工をしなくて



カッタ 内田 美枝子

は及びもつかない。たといどのような手段で分限の上の者の真似が出来ても、つましくその分限を守つて行くのよりは劣つていると思わねばならぬ。

一、万事について儉約を守るべきである。華麗を求めめるには、下の人民から貪らなければ、その出所がない。儉約さえ守れば、人民をいためず、侍から地下人や百姓に至るまで富貴となる。国中が富貴になれば、大將も鋒先が強くなつて、合戦の勝利疑いがない。我が亡き父の入道早雲殿は、小身より天性の福人である、世間で評判した。それでこそ天道の冥加を受け給うたのであるが、第一には、儉約を守り華麗を好まれないからである。すべて侍は古風なのがよい、当世風を好むのは大方輕薄者である、と常々さとしておられた。

一、手際のない合戦をやつて大勝利を得て後、おごりの心が出来て、敵をあなどり不行儀をすることは、必ずあるものである。慎んだがよい。こんなにして滅亡した家はむかしから多い。勝つてかぶとの緒を締めよといふことを忘れはならぬ。

右の訓戒を守つたならば、

当家は繁昌すること疑いない。

通読して見て、これだけの、なかなか書けるものではない、と感じるのはわたし一人だけではない。氏綱という人は智勇兼備の武将だといわれているが、それでもなお早雲と氏康の間にはさまって、その影をうすくさせられているように思える。

しかし、早雲、氏康にくらべてまさるとも劣らぬ人物だったばかりでなく、全国どこの武将の家を見ても、こんなにすぐれた二代目を見出すことはできないのではないかと、いえそうである。

わたしがこの氏綱の書置をとりあげたのは、実は別の意図があったので、はじめはこの全文を引用するつもりはなかった。

た。それをあえてしたのは、これがあまり人に知られていないことと、さらにその内容に現代でも充分含味すべきものが含まれており、みなさんに読んでいただく価値があると思ったからである。

それでは、別の意図とは何か。それを述べる前に、もう一つ読んでもらいたいものがある。

江戸の国学者で、著名な『嬉遊笑覧』をはじめとして多くの著書をあらわしている喜多村信節に『瓦礫雑考』という本がある。この中に「飯」と題する文章があつて、こんな話が記されている。

武將物語に、北条氏康公の御前で、嫡子の氏政公が食事の前で、

### 花びら餅中の牛蒡の冥加かな 市川恵子

小田原俳句協会副会長の作者、女流では俳歴の長い情緒豊かな感性の持ち主である。

お正月の茶事などに使われる花びら餅、花びらの形のものである。その由来は定かではないが、皇室では毎年元旦の祝膳に登場するようである。子孫繁栄の意味をこめた目出たい和菓子なのである。このような特別な季語で作句するのは中々むずかしいが、「中の牛蒡の冥加かな」とさらりと詠ったところは実に絶妙である。

(劍持芳枝)

### お白狐様、御開帳のお知らせ

新屋の稲荷神社では四年に一度の行事として来たる二月七日、初午の日、お白狐様の御開帳が行なわれます。

北陸方面の神社や寺院に見られる「ケサランパサラン」とは異なり、新屋神社に伝わる独特のお白狐様です。数百年の昔から他の神様と共に眷属として祭られています。(山口一夫)

御注意

拝観時間 午前八時～八時三〇分と短い時間です。ご注意下さい。

連絡先 Ⅲ三七〇〇八九 山口

お招伴をされた時、氏康公はその食事の様子を御覧になって涙を流され、北条の家は我一代で終るだろうといわれたので、氏政公は申すに及ばず、家老衆までがごとごとく興ざめ顔になった。その後、氏康公のいわれるには、ただ今氏政が食事をするのを見ると、一飯に汁を二度かけて食べた。およそ人間は若いものも年よりも、一日に二度ずつ食事をしてるのであるから、これをたんれんしないというのではない。一飯に汁をどのくらいかけたらいいか考えないで、たらなかつたからかさねてかけというのはまことに不器用である。毎日朝夕くりかえしてやっていることさえ、はかることができないものが、なんで一皮内にある人間の心を押しはかることができようか。こんなことでは人を目ききすることなど未来永劫できることではない。

わたしは「氏綱書置」と「飯」の二つを並べてみて大変面白く思った。

氏綱の場合は、氏康のことを「そなたはすべてについて、この父より生まれまざつて」と思うから別にいうほどのことはない」と絶対信頼しているのに、氏康は氏政をまったくおろか者として見ている。

氏政もまたすぐれた武將であつたという説をなすものがあるが、そんなことはどっちだっていい。わたしが興味を覚えたのは氏綱と氏康、氏康と氏政の二組の親子関係である。

これをどう考えたらいいか、人それぞれに受けとめ方はいろいろである。しかし、何となく考えさせられるものがあるような気がする。

はじめにことわつたとおり、この話が事実であるかどうか、そんなことはわたしは知らない。ともかく、こんな話がむかしの本に書いてありましたよ、とお知らせするだけである。

# 古城巡記

6



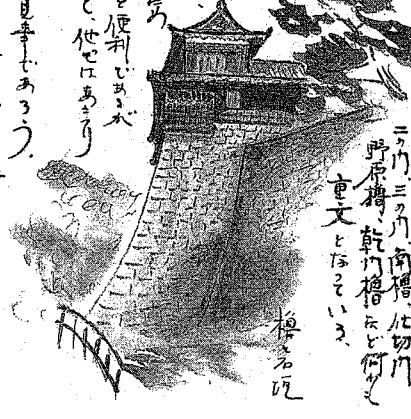
## 伊予松山城



松山平野の中心に勝山あり  
 慶長五年(一六〇〇年)に加藤嘉明より  
 建て始め慶長八年に五層の天守を  
 完成。その後備前守忠知が二ヶ丸を  
 松平定行が三ヶ丸と築き、この時  
 天守と唐平三層を改築せしむ。  
 堀と廊下をつなぐに連立式平山城と  
 天明四年(一七二四年)に落雷より焼失し  
 嘉永五年(一八二五年)に現存の天守が  
 再建された。従って松山城は城郭建築  
 史と最も期り多くと云われていす。

天守は奪り階段は柱で急で  
 登り狭し。天守に連なる櫓は  
 圓形に城郭の石垣は  
 丸亀城に匹敵する高きで  
 石垣の積り方にも柱の並びも  
 切り込みは、お世に感じて  
 建築の時期が違ふかも知れない  
 松山城は標高三三米、山はまき  
 早稲イヌは利用すると便利  
 城に登るとさうイヌイジからすと、他はあり  
 威い、こゝをさう放たあ  
 城郭には格別火ムカリ、春は見事であらう。

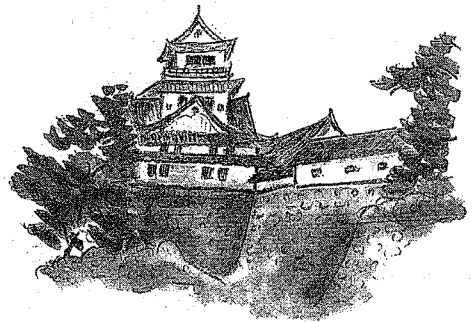
平成九年四月五日



天守と唐平三層を改築せしむ。  
 堀と廊下をつなぐに連立式平山城と  
 天明四年(一七二四年)に落雷より焼失し  
 嘉永五年(一八二五年)に現存の天守が  
 再建された。従って松山城は城郭建築  
 史と最も期り多くと云われていす。

梅名

## 高知城



高知城は高知川のほとりに  
 大高坂(標高四四米)と云う小山  
 山頂一帯が岡原、戦功によって、  
 地が固まるとなり、慶長六年(一六〇一年)  
 に着工し十年がかりで完成した城である  
 本丸建物の残存(天守、本丸殿  
 廊下、桐蔭門、多聞櫓など)が  
 現存している。  
 堀内より城へ入ると城跡は其土  
 公園と云う所あり。

三ヶ丸登り石段には板垣退助の像や  
 夫々の馬と像と云うものあり、  
 山腹に馬と像と愛馬の像が建  
 本丸を院から直降本丸に登るようになっている  
 のが、城の特徴、また天守の最上層を不  
 一段と高くなっている造りが、他の城と違  
 感じと云う。



五ヶ丸

編者註 松盆は小栗良英氏の雅号である。

# 酒匂史談 ⑧

## 川瀬 速雄

### 七 八丁河原と松土手

酒匂川の東側堤防下、酒匂橋より取水場の辺までを八丁河原と云う。

黒壘堰の西側土手三百十二間を松土手、酒匂川の副堤防と云う。

酒匂川は希代のあばれ川で、洪水、堤防の決潰の被害多く、小田原藩は酒匂川の水との闘いが続いた。藩庁も地元農民も川除普請(川さらい)や土手の強化に、たゆまざる努力を払って来た。

◎ 永応二年(二六三)稲葉正則は酒匂川河口の川除普請を命じている。

◎ 天明七年(二七五)酒匂村外十ヶ村が酒匂川堤に植樹を願ひ出た。これは、「酒匂村より神山村までの土手に、三年間に八千本の樹を植える」といったものである。

◎ 寛政元年(二七五)大久保加賀守に、安永二年(二七三)藩より借用した酒匂川通助成金七百両の返済

について、返済が滞ったため積りに積った利息を併せ、合計千七百六十兩二分永二百一文を三十年年賦で返済することを、上下郡十六ヶ村が申し出ている。

◎ 天保八年(二八三)酒匂川通堤川除普請を命ぜられ、永九十三貫二百六十分、永百七十七文三分の費用を費やした。

これは網一色村のことで、酒匂村には記録がないが、大同小異の川除普請が命ぜられていたものと思われる。

◎ 文献はないが、二宮金次郎が酒匂川の土手に松苗を植えた話は有名であり、毎年四月には農民総出で、川さらい、堰さらいをしていた。

◎ 八丁河原は、中世八木下郷のあった所だが、洪水等で幾度も流失し、土手の松も枯れ、土手の下は一米以上も抉り取られたような低地で、昭和十年頃までは芦や雑木に

覆われており、昭和の初期まで火葬場があった。レンガ囲いの屋根もない露天焼場で、炉に薪を積んで焼いていたと云う。

昭和七、八年頃、豚コレラが流行し、コレラで死んだ豚をこの火葬場で焼いているのを子供の頃目撃した。今も小字に八丁河原と残っている。

◎ 松土手は、酒匂川の水が堤防を越えて溢れるのに備えた第二堤防で、昔は松並木の土手であった。昭和二十年頃まで松の大木が一本残っていたのを覚えている。今も小字に土手根と残っている。

### 八 菊川と連歌橋

『新編相模国風土記稿』に、「菊川は村の西方を流れ、巾四く五間、末は十間余に至る。東海道の通ずる所に土橋を架す、長さ十二間、巾二間半、伝ヶ橋と呼ぶ」とある。

◎ 『源平盛衰記』に建久元年(二一九)源頼朝上洛の時、梶原平三景時が川中で発句を詠んだ際、頼朝が脇句を附けた。と書かれており、頼朝と景時が

連歌を詠んだことにより、連歌橋と云ふ様になったと言われる。

◎ 連歌橋東岸は、江戸時代酒匂川川越の川会所、高札場があり、川越場の起点となった所である。ここは明治三十三年(二八〇)より大正九年(二二〇)国府津く小田原間を電気鉄道が走っていた頃、変電所と停留場があった場所でもある。

### 九 酒匂宿

往古、足柄道と箱根道の分岐点(合流点)に位置した酒匂は交通上の要地で、古代より宿駅として栄えた。大宝二年(七〇二)小總駅が設けられてより、酒匂川渡渉と相まって交通、物資、軍事の拠点として栄えた。古文書、吾妻鏡等に記載されている事項を列記すれば、

◎ 承久七年(五三三)業平の二子滋春が、東国への下向を伝える『大和物語』第二章に「酒匂のあけぼの小總駅」の記載がある。  
◎ 元暦元年(二六四)平重衡が一の谷の合戦で捕えられ、鎌倉に送られる途

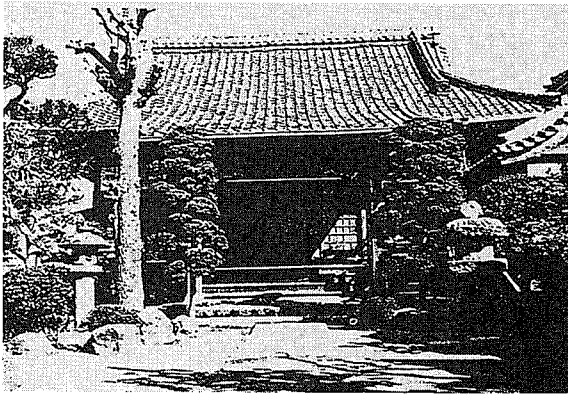
中当駅を通ったこと、文治元年(一一八五)五月、壇の浦の合戦に敗れた平宗盛、清宗親子が鎌倉へ護送される途中、酒匂駅に宿泊したことが、「吾妻鏡」に記されている。この時宗盛親子を護送して来た義経は頼朝の勘気にふれ、酒匂宿、瓦屋敷に留められた。義経の腰越状の話は、この時のことである。頼朝の勘気はついに解けず、義経は二十五日間酒匂宿に滞在、宗盛親子を伴って帰洛した。

◎ 建久元年(二一九)源頼朝上洛及び鎌倉下向の途中酒匂宿に逗留。また『曾我物語』にも酒匂宿に逗留したことが書かれている。

◎ 建保元年(三三三)正月、源実朝が伊豆箱根両所権現参詣(二所参詣)の折り、当駅に止宿、「金塊和歌集」に

浜辺なるまへの川瀬を行水のはやくもけふの暮れにけるかな

という歌が載っている。「まえの川は前川で、ここでは酒匂川を指すか。」と解説にある。



法船寺

◎ 貞応二年(三三三)『海道記』に「路八順ナレドモ、宿ヲ逆川(酒匂)ト云ウ所ニ泊ル(塩ノサス時ハ上ザマニ水ノ流ルレバサカカト云)」と書かれており、宿のあたりは、北は山を背に荒れた畑地、南は波打寄せる海岸で、交通の要所であり、半農半漁の村落である様子がうかがえる。又「来宿スル疎人ハ契ヲ同駅ノ席ニムスブ」と遊女にかかわると思われる記載があるので、酒匂宿に遊女が存在したと見られる。

◎ 暦仁元年(三三三)將軍藤原頼経、上洛及び鎌倉

下向の途中当駅に宿す。

◎ 仁治元年(三四〇)八月及び寛元二年(三四四)正月、藤原頼経、二所詣の帰路当駅浜辺宿に宿す。

◎ 寛元四年(三四六)七月、前將軍藤原頼経、執権北条時頼の打倒を企て失敗、京に返還される途中当駅に逗留。

◎ 文応元年(三六〇)十二月、將軍宗尊親王、二所詣の帰途当駅に宿す。

◎ 弘長二年(三六三)二月、奈良西大寺長老叡尊、鎌倉下向の日記に、「逆尾(酒匂)宿で休み、粉水(國府津)で宿泊した」と書かれている。

◎ 弘長三年(三六四)五月。宗尊親王、二所詣下向の時当駅に宿す。

◎ 文永七年(一一七〇)、建治元年(一一七五)、弘安三年(一一八〇)、公家飛鳥井雅有、鎌倉へ下向の折の紀行文、「最上の河路」「都の別れ」に「酒匂宿に逗留、舟に乗って海布刈りを楽しむ」

「酒を飲み管絃し連歌などして夜もすがら遊ぶ」などと書かれている。

◎ 応仁二年(一四六六)奈良興福寺の大乗院門跡経覚の日記、又興福寺の子院光明院主実暁の見聞録に、酒匂で宿をとったとの記録がある。

◎ 「法船寺縁起」には文永十一年(一一七四)日蓮上人、鎌倉より身延山に至る途中、大雨による酒匂川の増水で当駅法船寺地蔵堂に一泊したことが書かれている。

◎ 年代不詳。大村家盛が備中から鎌倉妙本寺等に参詣の途中、小田原、酒匂に逗留する。

◎ 永祿三年(一五七〇)夏、上杉憲政相州へ発向、当所に陣を取る。永祿四年(一五七九)三月、上杉景虎小田原に発向、小田原方には松田、石巻、神尾、大谷、多目、小池、松本を先として、一色、酒匂に出張して待機。又、今川氏真の家臣小倉内蔵助、援軍のため当駅に陣取る。

◎ 永祿十二年(一五七九)八月。武田信玄当駅にかかり小田原に乱入し、小田原城下町及び酒匂村に火

を放ち焼いた。

◎ 永祿の頃はなお宿駅であった。「海道宿次記」に、「小田原一里、酒匂、郡水、志保美と次弟す。按ずるに、郡水は今の国府津村の伝訛なるべし、志保美は塩海にして洶綾郡二宮村の属なり、是皆東海途中に続けり、是地より国府津へ二十町、小田原へ三十二町の道程なり」と

◎ 天正十八年(一五九〇)豊臣秀吉は、上杉景勝に武蔵忍への移陣に替え、酒匂宿に陣取りを命じた。

◎ 慶長六年(一六〇二)徳川家康は宿場制度を定め、特に東海道を整備し、江戸、京都間に五十三の宿場を設け、人馬を置き問屋場を設け、旅行者の便を計った。小田原は江戸より二十二里二十一町の所で、九番目の宿場となり酒匂駅は廃止された。

◎ しかし酒匂川が氾濫した時はこちらも、増水して川留になると、五日から長い時は一ヶ月にも及ぶ滞在の旅人を世話しなければならなく、特に参勤交代の大名が川留に

組頭、富農宅を副本陣にし、一般農家にも宿泊者が割り当てられた。費用は小田原藩の指示で少なく、中には旅費を使い果たした者さへ出る始末で、宿場でもないのに村民は少なからず迷惑をした。

◎ 私の家は天明の頃(一七五〇頃)の豪農家号佐五兵衛の分家で、私は九代目当主となる。屋号を「玉屋」と云う。屋号の由来は、文政年中(一八二〇)より明治二十七年(一八九四)まで七十余年間、酒匂字中市場の東海道街道筋で、お茶屋(軽食堂、雑貨店)を営んでおり、酒匂川川留の時などには旅人を泊めたと云う。宿泊代のかわりに旅人が置いていった身の回り品や書画が今でも残っている。文政年間お茶屋を開いた時、美人で愛想の良いお玉と云う若女房があり、お玉の茶屋、お玉の茶屋と呼ばれて、旅人や村の人のいいの場となっていた。酒匂宿の名残りである。

(つづく)

# 中村原郷 の思い出

## ⑥ 遠藤治郎

### 一獲千金

昔、棒手振りと言つて農家より蜜柑を買い入れて売り歩く商人がいた。大正十二年九月の大地震で根府川駅を通りかかった列車が浜に落ちて多数の死傷者がでた。たまたま乗り合わせていた商人が娘さんを助けて東京迄送つた。

その家が大財産家で御札に何か言いなさいと言われ、いま棒手振りといつて蜜柑を売り歩く小商人だが、上町山七町数反歩の蜜柑山が売りに出されている話をした。その山が五萬円と申し上げた主人が御札にくれたか、無利子で借りたか。一生懸命に蜜柑木を育てた。昭和初年頃から蜜柑の高價が続いて次々に蜜柑畑を買い増して西湘地区で一・二の蜜柑作り農家となつた。

この地方で昔、弟橋

媛が出生地とかで橘蜜柑に關連がある。コウジ蜜柑といつて小粒の香の良い蜜柑を食べた記憶がある。特に前川蜜柑は献上蜜柑と言われるほど名高くと古老に七十年位前に聞いた話。

### 浜降り祭

行基菩薩を祀つた地藏堂があつた。ある年伊勢の神官玉串某が仏門に入つて実心と名乗り、一夜をこの地藏堂に宿をとり、白髭の神を夢見し、そこで九寸五分の神体を刻み社を造つて元慶元年(七七)九月九日祭りを行なうと云う。また、現在の宮司の先祖松浦四郎入道綱泰が近江の滋賀郡にて白髭の悪夢に感応して、中村の地に来て白髭社を再興したと伝える。(故・立木望隆先生の小田原史跡めぐりより)

平成二年に浜降り八百

原より押切の浜に降る行事は、平成七年、平成十二年と浜に降りられた。途中何百年か途絶えた行事の復活と聞く。小生七十五歳の記念にと写真に撮りたく中村原の御興と同道して浜へ。久々に浜の汐風がすがすがしかった。八時三十分頃白髭の御興が、神官により式祭がすみ、羽根尾、中村原、上町、明沢、小竹、小舟の宮本の順に担ぎ廻ると聞いた。

### 死霊と生霊

不思議な霊で記したが広濟寺の乱塔婆を住職にお話して立派な供養塔に造り終る頃、小生の病が消えた。昔は物怪と言つて死者が現れる。小生が北鮮に行つたとき帰国しない。養母が心配の余りに、小竹で老婆が霊寄せをしていたので、お願いしたら兄武雄さんが現れて自分が南方の地で戦死したが、「治郎は霊が守つて必ず帰国させる」と言われて養母は半ば安心して帰国を待つたと聞かされた。また、同じように占つて貰つたら朝や夕な

に茶湯が飲みたいと童子が現れたとか。湯宿の話に赤子を浜の砂に生き埋めしてしまつた。家は代々早死にか病に倒れるとか。長い月日世間の様子を見るにつけ霊は有ると思われる。明治天皇の御歌に「心だに真の道にかないなば祈らずとも神や守らん」小学校の頃より信じて少しでも世の為、人の為に尽くしたら、死霊や生霊に憑かれたいように生きたいと思ふ。

### 下原の石仏

下原の地は、塔台川と中村川に挟まれた台地御産原の近くに道祖神や性の神がある。中村原公民館入口に性の神「双体地藏」と地神社と太字で刻まれた高さ一メートル余りの自然石が立つていて、側に一尺二寸位の真四角の塔がある。地神社とその塔を語る人は今はいない。何時頃からか馬頭観音と刻まれた石も置いてある。小生七十年位前から大人と一緒にどんど焼きの行事を手伝つた。性の神に女竹を大人

が蒔つて子供が運んで小屋を掛け「どんど」の終る頃、その小屋を燃やした。開発のためか、誰が馬頭観音を祀つたか知る人もいない。下原橋の袂に道祖神が二基、禪龍寺の境内に石の祠、字大門に、太田神と太字で刻んだ自然石、同じ大門に馬頭観音が二基ある。昔大森氏が早雲に追われて平塚の岡崎城に三浦の助けを得て曾我山小竹山と対陣して十七年間戦つた。また、上杉、武田と小田原に攻め込んだ折か、畠の中に自然石が置かれ溝に萩が植えられていたが、何か所か今は住宅建設で失われた。

### 笹葉天王

昭和七・八年頃、中村原で赤痢が流行して二軒の家で老婆と幼女が四人亡くなつた。その頃かそれより昔か、中村原に隣接する上町村で疫病が流行して二十数戸全戸被病したそうである。その時幾人か亡くなられたとか。昔は消毒液がなく、石灰を一面に撒く位しか方法もなく全村が被病し



た話は古老に聞かされた。

七月七日に子供等が七夕竹をかついで、家々を廻って笹竹で庭を打ち「天王様がいらっしゃった」と廻った。

家々では幾銭か賽銭を上げる。近年は子供等が笹竹のかわりに榊の枝をそれぞれ持って大人の祭典委員の方も一緒に廻ると聞いている。七夕を畠に立てたり、悪疫退治や願い事を色紙に書いて川に流したのは、四・五十年前のことである。

今は医療施設が完備されて大流行もなく世界で一番の長寿国であるとか。

### 稲荷講

昔二月十一日は稲荷講といつて組の人が当番を決め、当番の家では藁で造った苞に赤飯を詰めて家々に配る。当時は組が九軒で稲荷さんが無い家でも一緒に祀った。二月十一日頃は、前羽の海の大謀網に鯛が多い時は万匹近く揚がったと。小舟で運んで波が血で赤く染まった。子供の頃浜に行き、威勢の良い漁師の人

の声。漁師の人が米等と物交に来て切身にして醤油味噌漬けにして薪山開墾山に弁当のおかずにした。組の人達は昼頃集まり鯛一匹を出刃で捌いて、刺身や煮魚にして捌きの肴にして夕方遅く迄飲んだ。組の人達は酒が強くて四升空けたとか五升空けたとか。稲荷講も何時しかなかった。昔川匂に善波さんの稲荷社があり、そこに祈願すると鯛を始め豊漁があると聞いて、近在の人が奉納した。善波さんは田畑を買い求めて大地主になられたとか。

古老に聞いた話が七十年近く過ぎた。

### 竈造り

昔かまどを養父が造っているのを見ていた。上ノ久保禪龍寺の畑の上の粘土で瓦を焼き、草葦屋根の「おぐし」に載せた。藁等を混ぜて良く練って焚口二つの中央に煙り出しの穴を作り穴の上に五徳を置いて茶湯を沸かす。かまどに焚く下刈の枯萩や女竹・萱等を二尺位の長さにおぞくって束ね

て積み上げておき、かまどに焚く。良く燃やさないとい煙りが多く出るので叱られる。

そばは一回のほど水を打つ。うどんは三回の水を打つて箸に取る。風呂焚き、掃除、店番と小学校から早足で帰ってする毎日。たまに近所の子供等とメンコ等して一通りの仕事が終っていな

いと、畑仕事から帰って両親に叱られ夕食抜きで戸閉めされて泣いた。粘土で造ったかまどは、焚く程固く十年位は長持ちした。近年は耐火煉瓦で出来ていて、乳牛の乳房を拭く湯を古材で沸かした。最近餅搗きか赤飯を炊くぐらいである。

### 中村原の名木

大正十二年(二五三)の大震災で、御嶽の松の一枝が折れた。青年会場の建替資金に材木店に売った。(御嶽の松の稿参照)「けんぶん梨」の木が旧家に有って、小豆程の実が成る。その家の火災で焼けたと聞いた。昭和三十五年に禪龍寺の建替え

で資金が足りないと言われ、材木店に杉三十数本と、羽子板に使う羽の玉にする木薬子と言う太さを三つに切って、檀家二十数人が総出で運んだ。小生設計を担当して、この木を本尊様の板に使用するようお願いしたが、床柱と上がり框の二本だけ不満であったので、皆さんにお話した。その後、材木店の妻君と主人が早死にされた。あの名木が思ひ出される。

広濟寺に市指定の樹齢四百年位の柿の太木がある。今から二百年前に寺が火災に合い焦げ跡がありありとある。外に沼代の台地に千代の松、六本松、相生の松が有ったと聞くが今は根株も残してない。

### 歳の市

昭和初年頃、養父につれられて歳の市に行った。当時は電球でなくカーバイト瓦斯を使った灯りである。あのカーバイトの匂いが歳の市の夜店や十月九日の白髭神社の祭礼の夜店で漂った。

昼間は御産原で野芝居、夜は境内の神楽殿で今日、下中座で上演される絵本太平記や阿波の鳴門とか養父と一番前の席で見入った。途中御興が宮付けとなって芝居を中断して御興が宮を三回廻って宮の正面に付け、御霊代を本殿に移す儀式が終って、夜の十時未に幕がはねた。十二月二十六日は歳の市、養父にねだって金輪の嵌っている独楽を買って貰った。私の句に「策売りの竹の匂いや霜の市」立木先生に句評を戴いた。この地方では歳の市で達磨を商っていて、年毎に少し大き目求めて神棚に並べる。外に飾り物道具類を買って家路につく。あの瓦斯灯の匂いが、七十年近く過ぎた今でもなつかしい思いがする。

(つづく)



## 私の青春 ⑧

## 続 軍隊の日常生活

入浴の時間は三十分であったが、正味は二十分位であった。週番下士官の監視の下に入浴したが、ぬるい時は中々浴槽から出られないので、入れない者が浴槽の回りに立ち口々に「早く出ろ」とせきたてる。

熱すぎる時は水を入れても時間までに適温にならず、とうとう浴槽に入れず時間が来て追いつ出される事もあった。

その時の週番下士官の気配りによってスムーズに事が運ぶか否かが決まったように思われる。

第三洗の時などは、どぶ水のような湯となつている事が度々あった。第一洗、第二洗の時に入った中隊の躰によって違うのであった。

五時から七時までの二時間の内に、食事と入浴を済ませるのが基本であるが、その間にも忙しい事は沢山あった。

日常生活の身の回りの事と自分自身で全て行い、教育・訓練に付いて回る事柄をも処置しなければならぬ。しかもそれを

## 菅沼 博

実行している間中、監視され、是正される。

七時には午前中勉強していた教室に座っていた。

夜の七時から九時までは自習時間として指定されていた。

この時間の間に反省日誌と称するものを書かされ、今日の復習、明日の予習、教官に示された宿題等を片付けた。

この二時間は教室内の机上の事だけに当てられ、銃の手入れとか、洗濯とかという事は許されていなかった。

教室外に出るといふ事が出来なかつた。

この二時間が成績に大いに影響した。とにかく、自分だけ抜け駆けて夜遅くまで勉強するなんて事は出来なかつた。

この二時間は居眠りする者、真面目に勉強する者に分けられたが、ここでも週番将校、週番下士官が絶えず見回りに来るので居眠りする者は少なかつた。

勉強する時間はこの二時間だけで、学期ごとの試験等は無

かつたように記憶しているが、節目、節目に試験があった。

ここで頭の良い者、悪い者の区別がはっきりとついた。

同じ条件で同じ時間勉強させて試験する。良い点を取ったものは優秀であるということになる。

私はこの二時間を夢中で勉強に打ち込んだ。夢中になつてやったのは何もこの時間だけではなく、その外あらゆるものに夢中で当たつた。

九時になると自習時間は終わり、消灯までの一時間が本当の自由時間となつた。

この時間を利用して手紙を書くことが出来た。この時間以外で手紙を書いた記憶は無い。

又、昼間出来なかつた銃の手入れや、洗濯をした。

九時五十分になると点呼である。

内務班の各人は寝台の前に直立して週番士官の点呼を受ける。受ける要領は朝の点呼の時とそう変わりは無かつたが、特に印象に残っていることは、番号の呼称の速さであつた。

週番飛行兵による「番号」の号令で内務班の者は、順次に一から番号を呼称するが、それが何時ものすごく早かつた。

「一」と一番の者が呼称した時には、二番目の者も呼称を始め

ている。即ち、「いち」と一番の者が言った時には「ち」の時に、「にい」と呼称している。

分かりやすく言うと、「いち」の「ち」と「にい」の「に」とを同時に発声する要領である。

「ちに」「いさ」「んし」といのように、前の者が発声し始めたら間髪を入れずに発声する。

週番士官や週番下士官に何時もどやしつけられている我々は、点呼の前に何回も練習して点呼に臨んだ。

点呼の時の内務班全員二十五人の番号呼称は「アツ」という間である。

一番最後の者は特に声を張り上げ若干ゆっくり明瞭に「二十五」と呼称する。

要するに、番号を呼称するにもメリハリを付け格好よくやつた。

この要領の都合良いことは、一人くらい便所で居なくても呼称の途中を「まかせ」る事である。勿論、自分は何番かを事前に覚え、呼称の途中に抑揚をつける等の技巧をこらし、全員の糸乱れぬ呼吸が必要である。この要領で時々人員点呼をこまかした事がある。

屋外の敬礼動作においても十六期の先輩と我々十七期とは違つていた。初めは教えられた

基本どおりの敬礼動作で行っていたが、昭和十九年の春に十六期の先輩が卒業してしまおうと、我々は先輩の敬礼動作をそっくり真似して、後輩である十八期生に答礼していた。

拳手の敬礼は右の手の平を挙げ、軍帽の右庇の付け根に人指し指と中指の間を付けるように教えられた。

この場合、下げている手の平は最短距離で庇まで持つてこなければならぬ。

この動作は非常に単純のように思えるが、どっこい、この拳手の敬礼動作によって、兵隊になった出身が解ろうと言うものである。

私達は十六期生の敬礼動作をそっくり戴いたのであるが、その敬礼の要領は次のようなものである。

手を威勢よく庇の横に付ける時、掌を若干心持ち窪ませる。これは掌に力を居れて反り返らせるのと反対の力の入れ方である。掌を庇より若干上方に持つて行き、威勢よく庇に付ける。

この場合、庇に付けた掌は力が入っているため、若干上下に揺れる。この上下に揺らす要領が若干難しかった。

顔は相手の方に正対させるが、ぐっと顎をひき力を入れるため、頭が敬礼する方へ若干傾

く。しかも眼は相手を睨み付ける。という具合である。

とにかく、この敬礼動作により、陸軍士官学校、予備士官学校、少尉候補生上がりかが解った。

十時の点呼が終わると直ぐに寢床に入り、十時きっかりに消灯となる。即ち電灯が一斉に消える。

あのもの寂しい消灯ラッパの音階を文字で書き表すことはできないが、我々はこれを次のように表現していた。

「新兵さんはいかいそうだね、また寝て泣くのかよ」

このラッパの音色が中隊付ラッパ手により吹奏されると、全く物悲しく聞こえた。

とくに青年となっていたラッパ手は、わざと少年の我々に悲しく聞こえるように吹奏したに違いなかった。

このラッパが聞こえると、本当に毛布の中でシクシク泣いている者がいた。

このようにして我々の一日は終わった。

#### 明野教導飛行師団

私が宇都宮陸軍飛行学校を卒業したのは、昭和二十年三月の初旬のころである。

数百人もいた同期生は、いくつもの隊に別れて全国に転属し

て行った。私と小学校同級生であり、無二の戦友であった、新山君とも別れることになって、彼は岡山の飛行隊へ転属することになった。

一年半の間、彼と同じ内務班で過ごしたことが、私には楽しい思い出として今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。思い出というものは、苦しい事が沢山あっても、過去に流れた時を思うとき、それは楽しさに変わるものであるのかもしれない。

私は三重県の明野にある教導飛行師団へ転属を命ぜられた。

東北本線で上野へ、そして東京で東海道本線に乗り換え、宇治山田まで行く予定と聞いていた。

名古屋で乗り換えた記憶がなく、亀山で霧の立ち込める早朝、降り立った。軍用列車のため亀山まで直通であったのである。

途中、小田原駅に停車した。当時私は小田原に住み、小田原は私の故郷と同然であった。そこには私の通っていた小学校、中学校があった。

朝早く宇都宮を出た我々であったが、小田原駅に着いた時は昼を過ぎていた。転属を両親に報せてあったなら、車窓の両親の顔が見られたかもしれない。しかし、昼過ぎのブラッ

トホームは閑散としていた。

私は開く事が許されない車窓に顔を押し付け、蛭川のおじさんを捜した。

蛭川のおじさんは、私の家の筋向かいに住んでいて、小田原駅の赤帽として勤めていた。

駅の赤帽とは、駅の乗降客の手荷物を運搬するのを、業とする職業で、赤い庇付き帽子を被り、紺の制服を着ていた。おじさんの勤務場所は駅のプラットホームが定位置であったが、その姿をどこにも見つけることは出来なかった。

十数分の停車時間はアツという間であった。ゆつくりと発車した列車が速度を早め、小峰トンネルを抜けた。

列車は板橋町の鉄橋(国道1号線上)に直ぐにさしかかる筈である。その渡る時、はるかに見渡すことができる一瞬の間に、我が家はあの辺りだと瞳をこらしたが、家並の間の沈んで見えようはづもなかった。

僅か数秒の間の渡る鉄橋上の一瞬に、少年である私の胸に望郷の念が一杯ひろがった。

戦局益々激しさを加える時、いつ再び故郷へ帰れるのかと思うと、やるせない侘しさで私の心は一杯であった。つらい我が故郷との無言の別れであった。

本年は、平成十四年(二〇〇二)であります。

昨年、九月十一日勃発して続いている戦禍の和平が、一日も早く終結することを心からお祈りいたします。

今世紀は、遙かに一千年前の西暦年と同一歩調で、年代を刻んでゆきます。

相模権守でありました、源重之の歿年は、十世紀末と十一世紀初頭の分岐点(二〇〇)年、となっております。

目加田さくを先生、(文学博士福岡女子大学名誉教授、梅光女学院大学名誉教授)の著書『源重之集全訳』(風間書房昭和六十三年九月三〇日発行)、から引用させていただきます。

正暦五年、西暦九九四年枕草子起筆  
長保三年、西暦一〇〇一年枕草子擱筆

である」と記されており、源重之歿年の翌年一〇〇一年は、清小納言により七年間に亘る枕草子を書き終った年であり、それから四年後の一〇〇五年には、晴明神社で知られている、安部晴明の歿年であるといわれると同時に、源氏物語を起

筆する紫式部が出仕した年となります。

源重之相模権介時代の歌と思へる歌を、目加田さくを先生の『前掲書』九九頁から引用させていただきます。

### 源重之について 係わり抄 日下部 庄一



しました、その翌朝、(贈る祝の歌)

めでたい常盤の松の松島の磯に群れてあさるあしたづ、その千年の齢のように、元服の御子さん三人とも、それぞれさかえある長寿を保たれる事でしょう。  
予見出来ず。

#### 〔通釈〕

陸奥守藤原致正か。安和二年元六廿十二月二十六日「陸奥国飛驒使到来。彼国守致正與二権守貞茂一訴訟之事」日本紀畧。尊卑文脈を掲げらる。

と記されており、語釈に記されている安和二年(元六廿)は、源重之相模権介が着任してきた年であります。

については、祝の宴の姿を連想させていただきます。

重之公、在相模での所持品であったとされるものの中に、宴

に使用されたと思える品がありますので述べさせていただきます。

梅丸と呼ばれる、木製湯桶と対になっている木盃状のものについて、想像を逞しくしながら述べさせていただきます。

直接手にとつて使用するものと考えます。上部縁廻りの直径は、訳十四センチ程ですが、内法の深みは、直径に比較して浅く、なだらかに凹んでおります。中に入る容量は、飲酒に用いて、喉ごしを潤す程度の量であると思ひます。

手に持つて、緑の裏をよく拝見しますと、漆が減摩されたようにみえる、色褪せた部分があります。

杯事に使用されて、幾年も重ねられて、人々の下唇によつて滑らかに、すり減つたと考えます。

下部持上げ部分は、脚の立ち上がり、縦二センチ程で、低部の直径は、五センチ程であります。

引き続き目加田さくを先生の『前掲書』一〇〇頁から引用させていただきますと

この加冠した三人の男子

むねたか、みちのくに、てごも三

人が、うぶりしはべりけるまたのあしたまつしまのいそにむれあしたづの

おのがさま、みえしちよかな

〔通釈〕藤原致正が陸奥で、子ども三人が元服加冠

とは齊光・保昌維光か、又は保昌・維光・保輔か、保昌は和泉式部の夫、保輔は有名な盗賊となった。その彼等が幼少の日、加冠の祝に元輔(重之)が歌を詠んだ。彼等の将来の運命を予想もしなかつたろう。

先日のことでした。自宅でテレビのスイッチを押しましたら、歌舞伎の場面が映ってきました。芝居は始まっていて、中途でしたが、江戸時代を想定した舞台のようです、題名は知らず、登場人物は、

はかまだれの保という、江戸では手に負えぬ無頼漢が、京の悪公家達と淫らな関係を、たのしんでいるところへ、供を従えた、足柄山の山姥が駕籠に乗って現われた、保を心配して、遠くから、保のなりゆきを見守っている。そういう風景が演じられて、やがて舞台は、最終場面を迎えます。追いつめられて、保は御殿の上で自害をします。

この劇の解説者は、保の今までの行動と、この結末を迎えるのは、実は、源氏への忠義の上からの、保の行動で

あった、と結んでおります。この芝居の登場人物、保のモデルは、平安時代の人物で、藤原保輔であろうと観客は判断していたと思います。

視点を戻させていただきます。小学館『新選古語辞典』日本文学史年表、によりますと。清小納言の父である、清原元輔の歌集元輔集と、平兼盛の兼盛集が成立したのは、共に正暦一年(元弘)、であることが記されており。

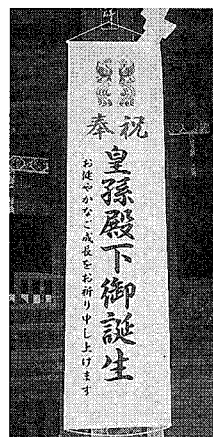
目加田さくを先生の『前掲書』、加冠の祝い歌は元輔の歌か、或は、重之の歌かを拝見して、重之集に編纂される、重之公周辺の「うたげ」の情景を、私は思い浮かべることができました。清小納言によって作られた入口から、トンネルを通りぬけて、千年後に、一年分の風圧として押し出されて来たのかな、と、その様な気持ちで、目加田さくを先生の『前掲書』を引用させていただき、文を書かせていただきました。



# 落穂集

◎「百歳万歳」会員の市川一郎さんは、去る一月六日(日)百歳となられた。今も矍鑠として郷土史研究にいそしんでいらっしゃる。なお、小田原市の表彰と重複を避けるため、昨年白寿を祝し本会で記念品を贈呈した折り小田原ケーブルテレビが取材したのは、記憶に残っている。

◎内親王様お誕生。暗雲ただよいう世の中に国民の喜びは一人。全国各地で祝賀行事が行われた。小田原のさるディナーサービスではお誕生を祝し、雅子さまの御懐妊中の食事メニューと同じ食事を作り利用者に供したよし。◎曾我保夫さんは、今年の夏、九十歳になる。本会の副会長として重鎮の役割をはたしている。昨年十二月九日(日)、足柄平野に伝わる「お飾り」作りを小学校四年生以上の児童を対象に小田原郷土文化館で伝授。◎昨年十二月一日(土)午後二時から、第五回「夕顔忌」(中川与一文学記念) 墓前祭が久野・東泉院において開催された。◎小田原駅前丸井百貨店、この三月に閉鎖する由である。再建中の長崎屋、全国で三十店舗閉鎖するが小田原店は生き残るとの話。◎さるスーパリーの小田原店、特売日の火曜日は賑わう。各売場は混み合っている。肉の売場は一人もいなくガラカラであった。勿論、狂牛病の影響である。カメラを持っていたら、よい証拠になったのに残念。

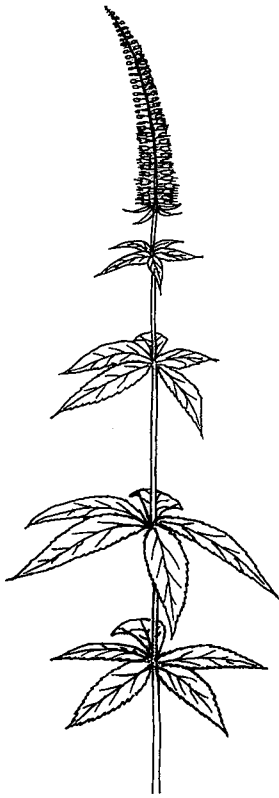


▲二宮神社にて'01.12.7

## お詫び

小田原史談平成十年十月号(第一七五号)で、「新編相模国風土記稿を糾す、足柄下郡中里村の起こり」を発表させていただきました。この内、一項「元和三年検地は、慶長検地の誤り」は、原家文書「巳ノ三月一日検地帳」を「写し」とした私の思い込みであったことがわかりました。これは写しではなく「巳ノ年」検地帳と思われ「写し」としても「巳ノ年」は検地実施年と判断できません。従って、検地実施年は、文禄二年か、慶長十年、そして元和三年も考えられます。軽率な記述に深くお詫び申し上げます。(石井啓文)

クガイソウ (ごまのはぐさ科)  
Veronicastrum japonicum



筆者原図

神奈川県内では、丹沢の主峰である蛭ヶ岳や丹沢山にだけ分布していた植物で、現在は丹沢では見ることができなくなった植物がある。それは図のようにスマートな草姿のクガイソウという植物で、姿を消してから三十年近くもなる。昭和五三年に、県内の植物分布を一冊の本にまとめるための調査をはじめたときにはもう絶滅状態にあったから、丹沢でクガイソウを見たことのある人は

ほとんどいない。しかし、私は草いされのする炎天下の山麓から、ようやく蛭ヶ岳の山頂に登り着いたとき先ず迎えてくれたのがこのクガイソウであつたことを鮮明に思いだす。枝分かれせず、真つすぐ伸びた茎の各節から数枚の葉を車状に着け、先端に紫の槍のように尖つた穂を立てて、風に揺られて並んでいる姿は蛭ヶ岳の景観として印象深い。蛭ヶ岳にまだ山小屋が建てられていなかっ

た頃のことである。当時採集した標本が今となっては貴重である。クガイソウに限らず、丹沢に豊富にあつた植物でほとんど姿を見せなくなった種類がたくさんある。山草ブームによるマニアの乱採取が原因であることが明らかなものもあるが、スギ、ヒノキ、カラマツなどの植林地の拡大で植物の生育環境が変化し、それに関連して丹沢上部の鹿の過密による食害が大きな原因になっている。それにしても一本や二本はどこかに残っていないかと期待したいが、残念ながら今のところ絶滅と判断せざる

# 丹沢の植物

⑤〇

## 城川四郎きがわしろう

# 御休み処「角吉」かどきち

東海道と旧東海道の合流点



12月4日撮影

を得ない状況にある。

山梨県の三つ峠でも、信州の山々でも、鳥取の大山でも、加賀の白山でも、各地の山を歩けばクガイソウにお目にかかることが多い。そのたびに丹沢のクガイソウが脳裏に浮かぶ。

クガイソウは九階草の意で、輪生葉(節)に三枚以上の葉が着く)が重なっている様子から名づけられた。

「丹沢の植物」を閉じるにあたって ひとこと

小田原城内高勤務の頃にお世話になった岡部先生から、小田原史談に丹沢の植物のことを書くようにとのお話があり、お受けして書きはじめました。どうも『小田原史談』にはそぐわない内容で、会員の皆様にはご迷惑ではなかったかとお詫び申し上げます。それでも県内では丹沢だけに分布するかまたは丹沢に分布の多い植物だけを取り上げてご紹介してまいりました。だいたい五〇種で、主な植物は終わりましたので区切りの

よいところでこのシリーズを閉じさせて頂きます。長い間、つまらない植物解説に付き合って頂き有り難うございました。拙文ながら丹沢と箱根では植物の種類にかなりの違いがあることがわかって頂けたらうれしく存じます。わたしが代表となっている神奈川県植物誌調査会では今年、『神奈川県植物誌二〇〇一』という本を編纂し、小田原市入生田にある県立生命の星・地球博物館から発行しました。

〔編集付記〕

この本には県内の植物の種類と分布が詳しく示されています。植物の分布は、常に一定のものとは思われなない。特に現在はその傾向が強いのではないかと考えてあった植物がなくなくなり、新しいものが取って変わるといった変化があるに違いない。丹沢の植物として例外でなからう。年代の経過による変化、それは植物の歴史であり広義の歴史に入るの

出はないか。そんなこと云うと植物を専攻する方から苦情がでるのではないかと内心気にはなる。しかし、史談会会員の中に「丹沢の植物」のブックナンバーはないかと照会を受けたことがある。

ところで、城川さん(敬愛をこめて「さん」付けで呼ばして頂きたい)は、同僚・生徒の信望厚く小田原城内高校在職中、休日に生物部の生徒を丹沢に引きつれて植物を探査中、自ら発見したオオヤマサギソウの変種を生徒が発見したとして新聞に報道された。

転任後、県立高等学校長を歴任、昭和六十三年(一九八八年)定年退職、県立博物館で植物担当の嘱託として勤務。この年初版『神奈川県植物誌88』の発行に専念。平成八年(一九九六年)に神奈川県植物誌調査会会長に選ばれるや売り切れした初版の改訂増補を企画し、昨年の七月、『神奈川県植物誌二〇〇一』発行、神奈川県に自生する植物の種類とその分布状況を調査した結果を植物の解説と分布図でまとめ



れ、会員は現在約二四〇名。

その内容は、県内外のその筋から高く評価されている。隠れたベストセラーと云うべきである。ちなみに、神奈川県植物誌調査会は、昭和五十四年(一九七九年)以来十回行の二三八号以来今回に至るまでお寄せ頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

「丹沢の植物」の稿は、一九八九年(平成元年)発行の一三八号以来今回に至るまでお寄せ頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

## 酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(九)

## 谷口得二

板元不記載の草双紙ではあるが、確実に当年刊行の「中本型読本風作品」として、

「亀山敵討 改印なし 一勇齋門人 一盛齋芳直画が「国書総目録」の記載によると都中央図書館にある。これは前記した「亀山もの」の一つであるが、本書は「東海道天日噺」と同様は、隔丁毎に見開き図が廿四ある全四十八丁の一冊本である。「種清」の風変りな一オの次のような序文は、

敵討証文一冊之事  
一、今板勢州亀山におゐて石井の兄弟養祖父愁仇赤堀水右衛門打果し年末の本望を相違候孝義の亀鑑これに越もの有べからず忠信孝貞を策励の族ハ必ずこの書を覧むべし後世のため彫て如件

嘉永八年卯正月 柳下亭門人 柳水亭種清(華押印)

とある。表紙は紅嫌いの切付表紙であるが、(外題 芳幾画)とある、改印がないのは削り落とされた故の後摺本と見ることができよう。

そして、この序末の刊行年を

そのまゝ、受容するならば、「種清」の「描印初出」は正にこの草双紙からと断定できる。しかもこの描印は以後二度と用いらぬ華押印であった。余りにも煩瑣な華押印だけに、折角苦心して考へぬいて作り上げたものであつても、彼自らがその不便さの故に断念せざるを得なかつた描印であることは確かであつたと推考するものである。従つてその反省の上に、前述の「北民出」印が考案されたものではなからうかと推考したい。

△艶本について

この件については、おそらく、もうすでに内職として艶本を執筆していた傾向が十分に推量できるのであるが、残念ながらその証を握み得ることが出来ない状況である。溪斎英泉と競う艶本の数の多さに、どれが初作であるか、板元はいわずもがな、発刊年の記入もほとんどないこのジャンルの作品では全くその見当もつけ難い。しかし現時点では刊年記のある最初の作品としては、「千種花二羽蝶々」という外題のある作品を挙げるこ

ができる。本書序末に「千時月中の嫦娥（うがのの別名）の前にあるといふ玉戸に比したる、卯のはつ春 淫水亭開好記(三凸四)「印とあつて、この「卯」を、いつの歳の卯とするかとするのかも一つの問題であるが、つぎの周期の慶応三年とするよりも、安政二年の「乙卯」とする方が妥当であるように思われる。本書は重版が多くて、現在でも入手し得る原本のことごとくが後摺本で、板木の痛みもはげしく、字も絵もその線の明確さをかく程つぶれているので、どれ位の部数の本が摺り出されたものか全く不明である。初版板木が安政二年十月の大地震で焼失したと思われるが、再刻した板元、喜楽堂が好評なるが故に、しきりに摺りまくつて稼いだ艶本であることは確かである。摺りの状況から判断してみても、摺りの鮮明なるものほど、表紙が色摺りで、後版本と思われるもの、表紙は無地色に貼字題簽の体裁であつた。序文一丁半、絵は凡て見開き図で口絵一図、挿画十九図、全四十八丁の一冊本である。好評の作品であつたがゆへにか第三編まで刊行されているが、現在も巷間に出回っているもの、ほとんどがその初編である。画

は「淫水亭」自身の作であることは云うまでもないが、その画

にしても多くが模倣ではあつても、その画力はやはり職業絵師としての腕を持つていたことは認めざるを得ないのである。

隠号の「淫水亭」と称呼しているのも「柳水亭」のもじりであることは容易に推理することができるが、「開好」はまた新考案の隠号である。この読み方については、すでに、昭和四十三年刊の「愛書くらぶ」・8号(淫水亭開好)で林美一が指摘しているように、「仮宅草双紙さしもぐさ」の序末の署名に「淫水亭開好」と記して、振り仮名が「へばかう」とつけられている。

また描印の「三凸四」印は、柳亭種彦が用いた「三ヒコ」印に似せたサイコロ印であり、これがまた、柳亭の孫門下を示す一種清「その人であることの一つの証左ともなる。しかしこの印の使用期間は短か、つたようで、以後の艶本では「(通運堪鹿)軍談」初編・二編にあり、さらには戯作者についての問題を提起している「艶品定女」の袋絵にもこの描印があるので、この書を「淫水亭」作と断定することも可能であろう。ただしこの凸凹印については、江戸末期の図案家として高名な「梅素玄魚」も同じ凸凹印を使用している。従つてこの凸凹印を「玄魚」の描印とすることも可能であ



る。然しここに認められるさらにもう一つの子持丸印の原形態は、歌川派の年玉印の変形としての子持重層年玉印(国貞使用のもの)を模したものと指摘できる。それゆへ、ここでは、この凸凹印を戯作者印として、本書の序文の筆者「煙楽山人」を「淫水亭種清」とも理解し、また子持年玉印様を画工印として、未確定ではあるが歌川国盛と理解することも許されてよいのではなからうか。

○安政三年の開板本について  
△甘泉堂泉市からは、かつて往昔、歌川豊国が掘り起されて斯界に登場してきたように、今は「種清」がまたこの板元に拠つてこの年もまた次に挙げる一点を刊行していた。

復讐伊賀曙 改印前「卯三」後「卯五」一寿斎芳員画

前後編の外題の読み仮名に違いがあり、「前」が「い」のあけぼの、「後」が「い」のあかつきである。改印が前年の外歳安政二年三・五月であるにも拘らず、発販が(前上)序末に「安政三年春発市」とあるように極度に遅延していた。これは恐らく同二年十月二日の所謂安政大地震の影響による遅刊と考へて間違いない。注は「前」が「伊賀越」、「後」は「伊賀英」である。序文にも「此書の実名雑法

転輸それを劇場の中興作者近松半二が変案て転輸といふ因をバ貴童に解るやう伊賀越道中雙六とハ……わづか二編の丸本じたて」とあるように表紙には「種清編」、前上巻末は「……録」、下回「……綴」、後上回「……編」、下回「……訳」とあつて「作」の用字を意識して遠慮していたことは確かである。

しかもこの後編序末には、今迄「種清」の歌川入門をしばしば記してきた実証としての年玉印が描印として始めてこゝに登場したのである。そしてこの年玉印の中に「田」の字を斜めにして「種」(たね)を(田)を寝かせる意を表徴化していたのである。少くともこの年玉印は歌川派も豊国門の専属であり、その限りに於て「種清」が確実に当時この門下として礼をとったことは否定できない。そこで彼の師とは「歌川の誰人かが追求の的となる。

さて「種清」こと「能普輔」の身許保証人は先記のように亀井戸在の仏師たる高沢丈山であった。おそらくこの親類縁者と推定される「丈山」の住所とまた初代歌川国貞との住所は正に同じ亀井戸でこそあった。このゆへに何かしらの知音もあり得ることも否めまい。これに加えて「柳下亭種員」とか、「河

竹新七」の筋からの推挙もあり得よう。しかし嘉永六年頃には初代「歌川国貞」はこの亀井戸をはなれて柳島へ転居していたのである。この事については、昭和十八年五月刊行された、大村「近世風俗画史」には、「国貞……同(註弘化)三年門人国政(註三代)に長女す。(名人忌辰録)では(なべ)とす」を以て二世国貞と称せしめ、亀戸を譲つて柳島の新居に移る」とある通りで、「種清」が「国貞」の亀井戸在時に入門する可能性など、年代的には全く考えられない。「種清」は当時日輪寺にいた筈である。しかも二代国貞と「種清」とは同年齢であることを考慮に入れると、嘉永に入つてからの能普輔時代に、二代国貞への師事もまたきわめて難しい理解となる。さらに別の方面からの考察として、初期作品群の一つ「踊形容花競」には「一陽斎豊国」こと初代国貞が殊更に初筆作品に画筆を執っている一事である。本書の板元が老舗泉市であるとはいへ、斯くも大家である三代豊国が、何故にこの処女作「踊形容花競」に寄画したのか、やはり師弟関係を些かでも汲みとることに於て理解もまた容易とはなろう。従つて「種清」は能普輔時代に、柳島

門をくぐつていたことは確実にある。しかしその画名が何であったのか、「曙」の描印をそのまゝ、単純に画名として読みとるならば、三代豊国の門下であるゆへに「国種」とでも読めるかもしれないが、この画名はすでに、「浮世絵類考」渡辺本にも「初代豊国門人」として記されているので、あるいは「二代国種」の画名の可能性もありうる。

また「種清」という、その人と全く同名の浮世絵師もいた。しかしこの種清は、例の柳島妙見堂の豊国碑の中の初代門弟国種の弟子、種清として、この柳島妙見堂碑の建立された文政十一年八月に名をつらねた昔時の人物である。戯作者「種清」は当時六才となることを指摘すれば、彼は全くの別人であり、二代種清の可能性が残されるのみである。

(つづく)

訃報

国見 隆彦さん  
(小田原市城山二二一六二)  
去る九月一日逝去されま  
した。

享年八十三歳

ご冥福をお祈り致します。

古文書講座 36

武田勝頼夫人の願文を読み直す

—虚心で古文書にあたる—

内田 清

◆短文構成の近代的な朗読文

写真版は武田勝頼に嫁ぎ、十九歳で夫に殉じ、代表的な戦国女性として知られる北条氏康の第六女桂林院(甲州では北条院・陽林院)が、氏神武田八幡に捧げた願文である。有名な文書であるが、まず虚心にこれを読み、次にその歴史的な背景と評価について考えて見たい。

癖のあるかな文字文なので、解説は容易でない。文書には25迄の行番号つけ、変体仮名を源漢字にして原稿用紙に筆写しながら、まず大意把握を目指す。次いで音読しながら適当な字句を選択・修正し、ルビや正漢字を行間に書いて、解説文を仕上げる。願文の要点は次の様になる。

① 不慮の逆臣木曾義昌が出てから国を悩まして。勝頼は運を天に任せ、命を軽んじて出陣した。自ら父母を害する事なのに、累代重恩の

輩も逆臣に同調した。

② これは万民の悩乱・仏法の妨げである。勝頼に悪心なく、怒りは炎え、恨みは深い。私も夫と共に悲く、涙が止まらない。

③ 神慮天命に真実があるならば、五逆(君・父母・祖父母を殺す)十逆(謀反・不孝・不義・内乱の罪等)の者たちを、天上の神仏は決して加護しないだろう。

④ 神慮に誠あるならば、運命の時であっても、願わくは霊神が力を合わせて、勝頼を勝たせ、敵を四方に退け、命迷いの可能性もあるを開き、寿命を延ばし、子孫繁昌して欲しい。

⑤ この大願が成就したら、夫と私で社壇を磨き、回廊を建立する。願文は神仏に祈願して加護を求め

る物だが、神前で朗読奉納した為か、短文で構成され、近世地方文書の元長さや、漢文調が少なく、祈願の趣旨を明確に述べている。夫と共に危機を克服しようとする強い愛にも裏付けられた近代的な文章だったのは驚きである。

また自筆と見られる願文は、若年者の作文の域を超えた、高い教養に裏付けられていた。『平家物語』の木曾義仲の願文の語句が十七も活用

されているし、『大平記』の「願文」、『曾我物語』の「寿命長遠」等が、適切に援用されているらしい。

◆願文は推敲不足の草案か

とはいえ願文には、かなりの欠点・問題点がある。幾つかを列挙すると次の様である。

a 望みのもたらわぬ

婦里よ(不慮)の希記新(逆臣)、出幾多川天(いできたって) 思いがけない姉の夫の反逆となつての意味だが、ゲキシン(希記新・遣記新)はおかしいし、幾も変形している。

b 神可ん(鑿)王多くし(私)奈く 靈妙な鑑識は、公平を欠かないの意味だろうが、「神感」だと、神に私心がないことが通じるとなるのだろうか。

c 志由めう(寿命) 志やうおん(長遠)

寿命が長久の意味だが、筆字では(ゆ)と(や)の区別がつきにくい。また、方言でも長を(志やう)と発音することは無いだろう。

d ミ奈りと(源)の加つ(勝)頼うち

(内) 祈願者自身の署名だが、夫の名の勝を(加つ)(可つ)と書き、頼を異体字で書くのは何故だろう。「武田勝頼滅亡記」を書いた尼は「かつ

より」「勝頼」と書いている。また3行目で、武田の太郎を「竹たの大う」、署名の中の源を「ミ奈りと」と読めるように書いている。

e 望みのもたらわぬ

8行の「哀れ身の父母」で「連」を落として加筆し、父母を「婦保」と書く。10行で「重恩」を「十おん」とした。脱字もあるらしい。男神八幡への願文としてどうだろうか。

aとeの事例は、女性の願文だからといつても、推敲過程の草案としか考えられない文面である。

◆願文を生んだ歴史的情况

願文の背景を簡単に見てみよう。桂林院は数え十四歳で、三男二女がいる三十二歳の勝頼の正室となつた。長篠敗戦後三年目の正月だった。勝頼の懇請と兄氏政の政略での結婚だったから、二年も経たないうちに武田と北条は各地で戦い始めた。

五年後の正月の木曾義昌謀反は、勝頼を危機に追込んだ。二月一日織田軍が進攻開始。翌日勝頼の諏訪出陣。同十六日勝頼軍鳥居峠で敗退。十九日に夫人の祈願。三月二日高遠城陥落・北条軍は駿河の武田軍を追い、吉原で富士川北上を策していた。

桃の節句の翌三日には、本拠の新府城を焼いて東方へ退去。十一日には頼りにした部将に退路を断たれ、天目山で名門武田家が滅亡した。夫人は、願文祈願からわずか二十一日



後に、わずかな一族と共に、夫に先んじて自刃したのである。

◆願文の評価をめぐって

夫人に実子はなかったが十九歳で夫や家に殉じたことから、現代でもなお美談として語られている。しかしそのことで、夫人の行動の全てを安易に美化、称賛してはならない。夫人の人間像を正しく捉える手がかり、歴史認識の問題として、願文の評価を整理してみよう。

大先輩中野敬次郎は、「小田原史談」百十三号で「(a)如何にも書道を修練した女性らしい麗筆であるが、(b)悲壮な文辞と、一途に夫君の身と婚家を思う真烈の一字一句には、読んで涙を誘われないものはない。;(c)この人を信じて運命をともしようと決意を固めた夫人のけなげな心情が、願文に側々と伝わっている。」と述べている。

私は前節のように分析して居るので、(a)の「麗筆」には反対だが、(c)の「けなげな心情」には賛成である。

笹本正治「戦国大名の日常生活」

は、「(1)戦国大名の夫人の神への願文が殆ど知られず、内容が夫の延命を祈ったことも特殊だ。(2)「逆臣」を「けき新」としたり、本来抜かれない字が後から加えられる等に疑問も残る。(3)「木曾願書」との類似が、夫人の：教養を知る材料となる。(4)夫の勝利を願う夫人の気持ち溢れている。夫婦の愛情は戦国大名にも存

在した。(5)勝頼は現代人と近い夫婦愛を育てていた。と書かれている。私は(1)に注目し、(2)には同感するだけでなく、前回果せなかった原文書の確認を行い、紙質等からも奉納願文が草案か等を明らかにしたい。(3)の教養については何時どのような学習したかを知りたい。(4)は認める。(5)は他の史料も挙げられているが直ぐにはうなずけない。

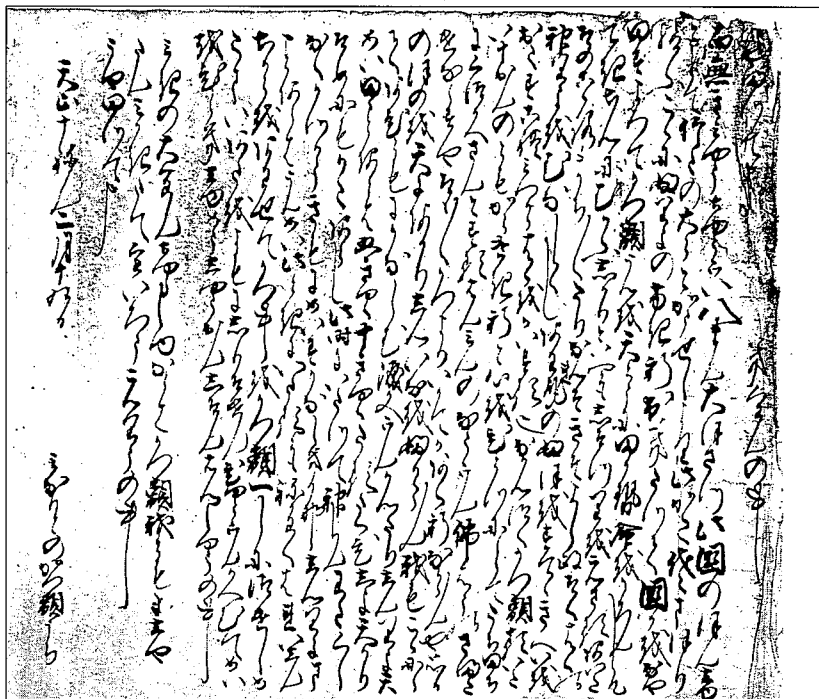
しかし勝頼夫人は六歳の時、兄氏政が信玄との同盟が破れると共に、

信玄の長女で、十二歳で興入し六人の男子を生んでくれた正室(二十七八歳)を離縁したこと、甲府へ帰った夫が半年以内に死去したことを知っていた。従って私は、賢明な勝頼夫人が、夫と兄が敵対した時から「も小田原へは帰れない」と必死に愛情を育てようとしたと考える。これが、極めて珍しい願文を生んだ背景にあることを指摘したい。

勝頼夫人は本城を捨てた三月三日夜、柏尾の大善寺を宿にした。「武

田勝頼滅亡記」は、夫人が薬師如来に祈願して次の歌を詠まれたと記す。西を出て東へ行きて後の世の宿かしはをとたのむ御ほとけ

この日は太陽暦だと四月五日である。今この道を行くと何処も桃が開だ。当時どれだけ桃があつたか知らないが、夫人は春たけなわの野道を落ちながら仏の世界に生きる覚悟を固めたいらしい。願文祈願から十三日後の事だ。滅亡の日迄あと八日である。



1 解読文  
うや満川て申。幾く王ん事  
南無きミやうちやうらひ、八まん大は香川、此国のほん志ゆ  
として、竹多の太うと加うせしよ里此加多、代々万ほり  
給ふ。①、丹婦里よの希記新出幾多川天、国可越奈や  
満春。よつて可つ頼、うん越天う丹満可勢、命越可るんし豆、  
て記らん丹む可。志可うといへとも、志そ川里越えさ頼阿い多  
その古、路ましく多り。奈んそそしし政そそそく能  
神里よ越む奈しし、阿士連身の婦は越春て、さへい越  
お春、古禮ミつ可ら者、越可頼也。奈加ん須く、可つ頼頼い多  
い十おんのと毛加ら、遺記新と心越飛と川丹して、多ち満ち  
你く徒可へさんと春類、者んん人の奈つらん、仏者う能さ満多  
遺奈ら春也。そもく可つ頼い、可て可阿く新奈可らん也。思日  
のほの越、天阿阿可り、志んい奈越婦可、らん。我毛、一丹し  
天阿飛と毛可奈しむ。派又らん可ん多り。志ん里上天  
めい満こと阿ら者、五きやく十きやく多類多く飛、志上天可り  
そめ丹毛可こ阿らし。此時れい多川て、神可ん王多くし  
奈く、可川可うき毛れい春。可奈し幾可那。可ん里よ万  
こと阿ら者、うんめい此と記れい多類とも、可ん王く者、連い志ん  
ち可ら越阿王せて、可つこと越、可つ頼一(ん脱?)、丹徒遣しめ  
多万い、阿多越よ毛尔志り遣ん。飛やうらん可へむてめい、  
越飛ら幾、志ゆうめう志やうおん、志そん者んしやうの事、  
多んミ可記多て、く王いろうこん里うの事。  
うや満川て申。三三王日  
天正十初ん二月十九日、三奈りとの加つ頼うち

片岡日記 24

片岡永左衛門

大正十四年二月

七日 曇  
出勤奔走。

一日 晴

八日 雨

午前出勤。午后より小田原藩史編纂委員會ニ出席四時帰宅。

二日 晴

午前九時発ニて本店に行。金子藤沢町長二面會

三日 晴

余談ニ同氏ハ全国町村長會々長ニ普通選挙ニ至テハ全国町村長ニ反対者多ク枢密院 陳情建白毎日ニテ枢密議員も反対に傾ク者多キも否決トナレハ現内閣ハ辞任セサルヲ不得去トテ後継内閣を引受

昨夜招電にて重役一同ト知事之面會好転シテ井坂氏ニ銀行整理案委託ニ付諾否を下問セラル。午后より本店にて株主委員會も井坂氏に委託ニ同意十時帰宅。

得ル者も見當すそく困却ナルモ議會ニ上程之日ハ非常之波乱を生ずべきハ明白ナリ反対も意志之強固之者も多く 或ハ血ヲ見如き不祥事もト憂慮シテ談ハセリ。去ル有名ニシテ信用アル新聞社ナトモ 社長ハ反対ナルモ新聞紙ニハ賛成之記事ヲ戴

四日 晴

ナト是も発売紙数より計上セシナランモ総て意志ニ表裏多く 時代之産物なるべきも困タモノトノ談話なり。

懸廳ニ承諾書を持參。最初請願ナレハ承諾書にも不為可キテ手数之掛る事なり。

宮ノ下支店より帰町し、當預金委員之一兩人面會帰宅す。

五日 晴 夕刻より雨  
出勤。午后帰宅。

十二日 晴  
風氣にて平臥。

六日 雨

十三日 曇  
風氣よろしからざるも本店より招電に重役一同ト懸廳に出頭。井坂孝氏より覚書ヲ知事に提出是ニ同意ナレハ整理立案すへ

久々にての雨。預金者委員に面會二時帰宅す。

九日 晴

同日 晴  
先ニ帰宅。他重役ハ縣官之照介ニより井坂氏と面會依頼之筈。

本店行。銀行休業継続之協議。

十日 晴

十四日 晴

休業継続ニ付預金者之諒解ヲ求る為メニ宮ノ下行。午后より仙石原ニ行。此道ハ始めて山容水態凡ならず確氷峠の古跡も実查し得ル処多し。仙郷樓一泊。夜ハ入湯シテ暖キま、起出テ箱根古道考え草稿ヲ書す。

十五日 晴

十六日 晴

平臥。井坂氏本店ニ来店トノ事。

十七日 雨

十八日 曇

本店行、六時帰宅。

十九日 正午頃雪

寒むし

暮しぬ

おぼろに見ゆるカラスとほして

雪ふれとつもりもあへす

庭たつみ

水るはかりにとけて浮

貯蔵の温州を出せしを見て

たくわ辺のみかんを出せ  
ハ色あかく  
よろこぶ子らの顔もう  
つくし

廿日 晴  
午前八時二十三分發にて貸付監査之為メ行員ト本店ニ行。九時帰宅。

廿一日 晴

午前八時二十三分にて本店ニ行。午後二時藤沢發にて上京親一方に止宿。

廿二日 雪

藩史編纂委員會にて大久保忠言氏麻布宮村ノ邸ニ行。降雪之為メ會スル者少し。同家ニ蔵書文書類ヲ見セラル中に忠貞公平常懷中物ニ入し左右を放サザリシト云紙包ヲ披見セシ。領分中之孝子出精者人の鏡ニナル者トシテ老臣より書出せし者之名前なりしニハ斯く民政ニ留意セラレシカト敬服ノ外なし。此委員中二旧友田中保之氏ニ久々にて面會。談遇書道こなし先年住友家ニテ出資し宮城前二楠公銅像建築し事となり肝胆セラレし人品川弥次郎子ニテ當時属官な

りし田中氏ヲ呼ヒ今回  
弥々楠公銅像之建築セラ  
ル、も此銘之筆者ハ其人

廿五日 曇

在宿。

根岸より中村前川二通ス  
ル山道有ハ御海道之遺跡  
なるへし。

畑裕来り。虫歯マチナイ  
禁厭ニハ馬千疋ト書シタ  
ルヲ紙ニ包ミ患者ノ鼻上  
ノ凹タル処ト同シ高サニ  
釘ニテ柱ニ打付ル事。心  
怪等ニテ柱ニテ安眠ヲ得  
サレハ廿一個ノ団子ヲ造  
リ厄靈ナレハ其靈によく  
浮ぶ様ニ念シ二週間海川  
二流す事。愛敬有者ハ眉  
二黒子十数テ。帰ルト  
大蓮寺上人来リ家事談話  
有シ。帰ると長岡ノ松木  
氏清一録談ノ聞合ニ来  
る。そか帰と小田原少年  
刑務所教師井口氏小田原  
牢屋ノ沿革ヲ聞ニ来ル。  
皆々変々用事ノミ。

物素行ニ留意セルニ或者  
ハ杉孫七郎ヲト云者有も  
彼ハ銅臭甚シク為ニ拙者  
ハ不好岡本隆徳氏ニ依頼  
シ度シ同処ナレハト中介  
ヲ託サレしも岡本氏ハ富  
豪権家ヲ好サレハ如何ト  
不安有りしも依頼之旨を  
談せしニ心より承引シタ  
リ。氏ハ格別之銅像ナレ  
ハト多胡碑銘ヲ床ニ拭ケ  
そヲ模シ六百枚之下書シ  
始テ書揚ケタルニ子爵死  
去サレ銅像ハ出来し潤筆  
料壹百円ヲ送ラレシニ子  
爵ニ推薦シタル片岡正次  
氏甚タ輕少ナリト住友氏  
ヲ怒リタルモ子爵ハ逝去  
後ナレハ如何トモナシ、  
難かりし。岡本氏ハ片岡  
氏ヲ慰テ曰ク元來潤筆料  
ヲ希望ケテ書セシニモ非  
ス別ニ不平ナレト其金ニ  
テ赤松二本ヲ買求メテ庭  
前ニ植たりト。

師長國跡踏查ニ府中村  
行。四時過ぎ帰宅。地名  
等より推考スレハ大友ハ  
和名抄時代ノ伴部 千代  
ノ高屋ハ高家カト思ハル。

七日 晴  
今日も平臥。近日ニ熱海  
迄鉄道開通ノ由ニ付此開  
通式ヲ期トシ熱海ノ交通  
ニ最も力を尽シタル人車  
鉄道ノ發起人石渡喜右衛  
門、露木準二、小松精一、  
樋口忠助氏等之表彰ヲ勸  
告シ、書状熱海町長ニ出  
ス。然レ共採用スルや否  
若し否決セラルルも故人  
ニ対スル拙者之情義也。

十一日 半雨  
十二日 半雨  
細君横濱二行。

十三日 晴  
藤沢本店行。途中にて  
雪と見し古辺人も忍れ  
てさき乱れたる梅の花  
園

廿六日 雨  
在宿。

廿七日 晴  
不快ニテ平臥。

八日 晴  
野崎廣太氏ニ往訪史談兩  
談數刻。

九日 晴風甚暖氣  
藤沢本店二行。午后より  
横濱ニ至リ中山毎吉氏ニ  
面會師長國府之遺跡ニ付  
拙者之意志ヲ開陳し中山  
氏ト意見之相違ヲ質セシ  
ニ遂ニ府中説ニ同意シ、  
午後八時半ニ辞シ、高田  
氏ニ止宿ス。

十六日 晴  
山田氏新築ニ付方位之相  
談ニ来る同行実地見る。  
(つづく)

廿八日 晴  
本店行。

廿九日 晴  
大正十四年三月

十日 晴  
九時横濱發にて鴨宮ニ下  
車下府中役場ニ至リ村誌  
ト地圖ヲ展覧シ下堀ノ師  
町國府ノ遺跡ナル可キヲ  
認メ田嶋に廻りしニ同村

十一日 晴  
むき青き畑けのくろに  
咲き出ていよいよ白き  
梅のいくもと  
用事早く済帰途また曾我  
ニ行葭岡城趾を尋ねしも  
末祥。

一日 晴  
平臥。

二日 晴  
平臥。

十三日 晴  
旧城内ニ新築したる帝室  
林野局東京出張所小田原  
派出所移廳式ニ参列清祓  
降神神進饌式昇神撤饌ヲ  
了テ久々ニテ天主台ニ登  
リ三時帰宅。

十四日 晴  
十五日 晴雨  
今日ハ来客多キ日早朝大

三日 晴  
本店二行。

四日 晴  
出勤。

十五日 晴  
今日ハ来客多キ日早朝大

十六日 晴  
今日ハ来客多キ日早朝大

廿三日 晴  
雪ハ昨夜止タル。道路甚  
タ悪しく十二時半帰宅。

廿四日 曇  
不例ニテ在宿。

廿五日 曇  
不例ニテ在宿。

廿六日 晴  
不例ニテ在宿。



## 水之尾の由来

澤地 英

風土記にみる水之尾村

小田原で唯一の落武者部落と云われている水之尾の紹介をしよう。

『新編相模国風土記稿』によると、水之尾は、元禄の改めに初めて村名をのせ、水之村にしたという。建長の頃、風祭大野亮光秀という者が、当所の領主である、つまり在名を名乗ったのである。そして風祭村より分村したと思われる。江戸より二十一里、東西約十町、南北六町程、東は板橋村、堤新田、西北は伊張山を隔て久野村、南は風祭村、東北は荻窪村、家数十三。検地は万治二年(二五五)であった。

得て、宅地に法華堂及び七面社を建立。同五年日蓮が休憩したとき、自分の子を弟子僧とし、妙音阿闍梨日行と号し、ここで日蓮光秀山浄光寺の号を授けられた。日行を住僧とした。今この日行を開祖に、光秀をその開基としてゐる。光秀は正応二年(二六六)三月二十三日没。その後永正十五年(二五五)に至り、今の地に移り妙光院と改めた。これより数代ののち姓を大木に改め、源右衛門清経、源藏経久、源三清房に至った。清房は上州沼田城にて手柄をたて氏康感状を与えられた。その後某年井細田口にて討死した。その孫内蔵介信宗のとき、北條氏が没落し、人となり、その領地で村民となった。信宗は寛永十年(一六三三)二月九日死。信宗に三人の子があり、長子助左衛門本家を継ぎ、子孫連綿として今の清兵衛に至り、信宗の遺物の鉄砲一挺を蔵している。

二男権右衛門信房の子孫、権右衛門と称し、信宗より伝わった鎗一筋を家蔵している。三男内蔵介信良の子孫幾右衛門といい、信宗が遺した弓一張・矢一筋を所蔵している。共に村民である。

大野亮光秀の後裔

光秀の末裔は、いま風祭村の隣村水之尾村に住み、清兵衛と称しているといわれている。

現在水之尾には十三戸の大木姓と、二戸の山本姓が散在している。山本姓は元従者であったという。十三戸は三人兄弟が分家したのであらう。皆大木姓であるので、オオヤ、インキヨ、ナケエ、ムケエ、シンヤ、イツケンヤ、クルマ、オオシモ、シモなどと固有名詞を使っている。

私の母の生家は、クルマといい、家の裏手に大きな水車があった。うどの材料になる小麦を水車でひいて、粉にしていた。そのため老農婦が入れ替り立ち替り姿を現わした。井戸端会議ならぬ情報交換の場でもあったのだ。日常の出来事を、

流暢な会話で語り、「ソーブラノー」と結んだ。納得の合槌を打つ独特のせりふは、異邦人を見る思いで、別世界にまぎれ込んだような感じであった。十三戸は散在すると書いたが、落武者の農家らしく一戸々々が孤立し、隠れるようにして立っている。

オオヤといわれる総本家があるが、その家から北方向五〇〇米程先に、毘沙門天が祀られている。大きな自然石の一枚岩が、毘沙門天に似ているというので、村民に親しまれたのであらう。毘沙門天は武將の信仰する神であるから当然と云えよう。

東の荻窪村境に山本姓の家がある。西端伊張山境にも山本姓の家がある。かつて緊急非常の場合、監視役をつとめたといわれている。

伊張山と小田原城に通ずる高台、要するに箱根外輪山裾の二つの稜線に挟まれた谷地となつて、荻窪村へ通じる地形は、内蔵介信宗が浪居し農民化したとき、身の丈

を越える篠竹と雑木の密生した落武者には最適の場所ではなかっただろうか。伊張山から湧き出た泉によって、細々と暮らしてきた苦難の道があったと想像される。

早雲の初期の四公六民政策による節約時代を忘れ、累を重ねて婚姻政策によって犠牲を最小限にして、領国を拡大していった爛熟期を迎えた。そして秀吉によって滅びの道歩んだために、世をすねた信宗の心情が思い出される。丁度、日中戦争に敗れ、軍国主義を捨て、モノづくり邁進し、世界一となった挙句、バブル期を迎え、四苦八苦する滅びの道歩んだ現在の世情に酷似していると思えてならない。

荻窪用水の開削が水之尾を変える

天明二年(一八一三)山北の川口広蔵によって、箱根堰を開削し、荻窪に通じる用水を計画した工事がなされたが、水之尾を変え、運命を変えた。その結果水之尾の荒畑は、美しい棚田に変わった。半

作農家となつて経済的にも飛躍した。とくに私の生家は恩恵をこうむつた。何となれば荻窪用水のおかげで、見事な水車を持てるようになったか

### 新刊紹介

#### ◇小田原の郷土史 再発見

著者 石井 啓文  
著者 石井 啓文  
著者・発行 石井 啓文  
千五〇〇三三  
小田原市東町三三三三  
五三  
匳〇四六五(三四)三三六〇

著者が郷土史を研究し始めてまだ六年ほどである。だが、その前に約八年ほど古文書解読の研鑽があり、解読を通して郷土史に引き付けられていったと言う。それだけに探究心旺盛な著者は、



らである。用水の影響外となった高台や山地に向つて、どこよりも早くミカン栽培に着手した。こうしてどこよりも進歩的で、純朴で、その上

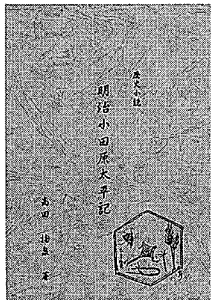
資料の宝庫と写つたに違いない。事実、好奇心に満ちみちて、今まで郷土史家が手掛けなかつた分野に突こんでいる。内容は、『小田原史談』やその他に発表したものであるが、その姿勢は新鮮で、将来に期待を持ちたい。

#### ◇歴史小説

#### 明治小田原太平記

著者 高田 掬泉  
著者 高田 掬泉  
著者 高田 掬泉  
千五〇〇〇四  
小田原市浜町三二一  
五  
匳〇四六五(二四)〇一八八

措くのは惜しいと、纏めたのは、かみやまアレルギー科・小児科クリニッ

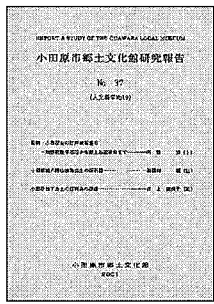


働き者であり、落武者的控えめな性格ともあつて、なお村民一体となる協調性が生きて豊かな水之尾を形成していった。それは遡つて、末期の

夕院長神山勉氏。才人の氏は、高田掬泉主宰の句誌『こよろぎ』の同人である。そのような関係から掬泉の句と俳画を、本書の随所に掲げ潤いを持たせている。原作が「歴史小説」と記するのは、作中に登場する実在の人物の配置や言葉が、虚構であるからだ。掬泉を追慕して止まない向山重忠氏と掬泉の奥様ヒデさんの巻頭言が載る。

### 郷土誌 目次紹介

#### ◇小田原市郷土文化館 研究報告



編集・発行 2001 No.37  
B5判 罫ページ

北條治政に愛想をつかし、離反していった信宗の、農民化した決断が、関連しているのではなからうかと思うのである。(おわり)

小田原市郷土文化館  
● 足柄・小田原産の江戸城石垣石  
―加藤肥後守石場から献上石図屏風まで―  
内田 清

● 小田原城八幡山古郭出土の旧石器  
諏訪間 順

● 小田原城下出土の灯明具の様相 井上由美子

#### ◇伊豆史談

二〇〇一年 通刊一三〇号  
A5判 五ページ  
著者・発行 伊豆史談会

● 函南町畑毛に関する一考察―「大石寺文書の讓状からわかること」  
土屋比都司

● 三島市の仮称「堀の内城」について  
土屋比都司

● 三島市錦田方言言葉  
鈴木 辰巳

● 豆州君澤郡中村の名主「鈴木家」の古文書に

さわじ・ひで  
大正十三年(二五五)生まれ。昭和十八年(二五三)横浜地方裁判所に就職、同十九年裁判所書記。同年(二十年)兵役。同二十一年小田原郵便局に就職、同三十七年鴨宮郵便局長、同六十一年退職。平成十年(二九八)小田原シルバー大学観光科入校、同十三年卒業。

小林 弘邦  
三島宿における朝鮮使節通行の負担  
土屋 寿山

「伊東祐頼」が背負っていた地蔵尊  
木村 博

石仏入門「庚申塔を読む」  
岡田 憲明

土方縫殿助について(5)『駿藩仕録』からの考察(2)  
辻 真澄

仁田四郎忠常と「猪」  
木村 博

庚申塚の考察―巢鴨庚申塚を尋ねて  
杉村 秘



第3回史跡めぐり報告

「八王子城址、武蔵陵墓地、宮ヶ瀬ダム」へ

九月十八日(火) 朝七時に小田原駅前を出発した四十九名乗車のバスは一路八王子へ。

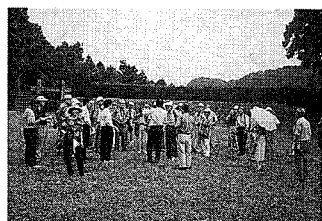
ドライバーさんが近道を利用したため、予定より一時間もはやく、八王子へ到着。先に、北条氏照の墓へ寄る。けわしい石段を登り墓参し、歩いて八王子城址へ向かう。

八王子市立郷土資料館の方の案内で、館跡を中心にまわる。発掘調査整備の苦勞話など直接たずさわった者ならではの話が聞けた。

次に武蔵陵墓地へ。昼食後、今年六月に完成したばかりの香淳皇后の陵、昭和天皇陵、大正天皇陵等を参拝。帰路、宮ヶ瀬ダムに寄る。ダム本体の大きさを実感し、ゆつくり見学して、予定より少しはやめに帰着。

参加者氏名 (敬称略・順不同)

- 山口一夫、勝俣淳一郎、岡部忠夫、湯山浩二、渡辺敏一、小川たみ、吉池清、府川正、早野廣司、早野光子、前田直江、額田常子、遠藤茂子、額田好男、田島貞子、加藤松枝、形岡タミ子、杉本剛氣、本多孝三、遠藤定雄、遠藤正治、伏見弘、岩本武、安藤三・繁美、鈴木孝、杉山薫、秋本央、本多チエ、湯川玲子、府川宏江、高田知予子、鳥海照子、谷津倉保、相原俊夫、高田ヒデ、河合多美江、劍持公一、和子、成川孝、堀尾節子、和田治助、小栗良英、笹田昌郎、澤地英、府川登喜男、川喜男、杉崎英吉、脇松雄



館跡にて

特別賛助会員

- 箱根湯本温泉 春光荘
- 箱根のお宿 小田原 冬彦のたまご
- 智恵袋 相田酒造店
- 小田原銀座 アオキ画廊
- 熱海 アオキクリニック
- 飛多魚屏
- 紳士服の アメリカヤ
- (株) アルファ
- 伝統工芸 石川漆器 (株)
- 税理士 石原和夫事務所
- 伊勢治書店
- 伊豆箱根トラベル 小田原
- 画材 ガクブチ ヲウエ
- 自動車修理 板金塗装 一ヨマン
- かまぼこ 株式会社 小田原魚市場
- 小田原ガス
- 小田原市農業協同組合
- 小田原報徳自動車
- オートセンター・スギヤマ
- オリオン座清
- かまぼこ籠
- JA神奈川信用
- カネボウ株式会社小田原工場
- 神尾食品工業 製
- 木地挽 日下部産業 製
- かみやま小児科クリニック
- 興電社
- 小伊勢屋館
- 小国府津
- (有) 小松石材店
- さがみ信用金庫
- 趣味のこぶく さくらい
- 正栄堂
- 和菓子 菜の書
- 八小堂
- 八平井
- 古屋花徳
- 株式会社 報徳
- 建築金物 (株) 星崎仲吉商店
- 家庭金物 本多時計店
- 松坂屋
- 学生専科 丸マルク
- 諸星運輸グループ
- 曾我の梅千 雄幸・かまぼこ 美の政
- みみづく幼稚園
- ヤオマサ株式会社
- 錦通り 山口菓子舗
- 防災器具 優光社

小田原史談(年四回発行) 創刊昭和三十六年一月

巻五十五

年会費 普通会員三千元 〇〇二〇三六四三三六